©The Tiffen Company, 2000
KODAK Gray Scale
Kodak LICENSED PRODUCT
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
Inches
Centimetres
KODAK Color Control Patches ©The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

0432

攝津名所圖會

住吉郡　一

291.6309
Ak
1

武庫川女子大学図書館
昭和　年　月　日
291.63
Ak
117087
1

伊澤影

中山前大納言愛親卿

凡例

一摂津名所圖會は全部十卷あり大畧郡名分ありて分川然れども東生郡西成郡は大坂市街の町續あれば郡名なくして其署書又舊史は百濟郡大郡小郡欠郡の名あれども後世移然るまゝ只今時の相とのみ順道ふまれと記書

一住吉郡の畏今時堺津大小洛まで分摂津國なれ然れども旧史ふ基く堺一津を和泉名所圖會ふまれと著に故ふ牡市卷ふまれ分者く左右應照しく今時の体を曉まゝ

一大坂市街ふ神廟佛刹多かゝ因茲諸社の祭式のゝ朝市夕市の繁花又い彩艘の船お泛し出帆帰帆河口の風景分圖しかゝを

一諸宗の子院末派の道場墳寺等いみふまれ除く粗都名所圖會の例ふ效ふ

一寺社の細畫ハ竹原春朝齊の一筆なり故ニ姓名印章かゝ
ざるものハ画ニ至ってもとゝ因是画面ニ姓名印章なきもの
もあるべし

摂津名所圖會卷之一

目録

浪速始元　摂津國號基　高津宮仁德天皇紀畧
春日高畫圖　夏景氷室肇　秋夜愛鹿音画　冬日散御網業作
大隅宮　長柄豊崎宮　味經宮　延喜式郡名目次

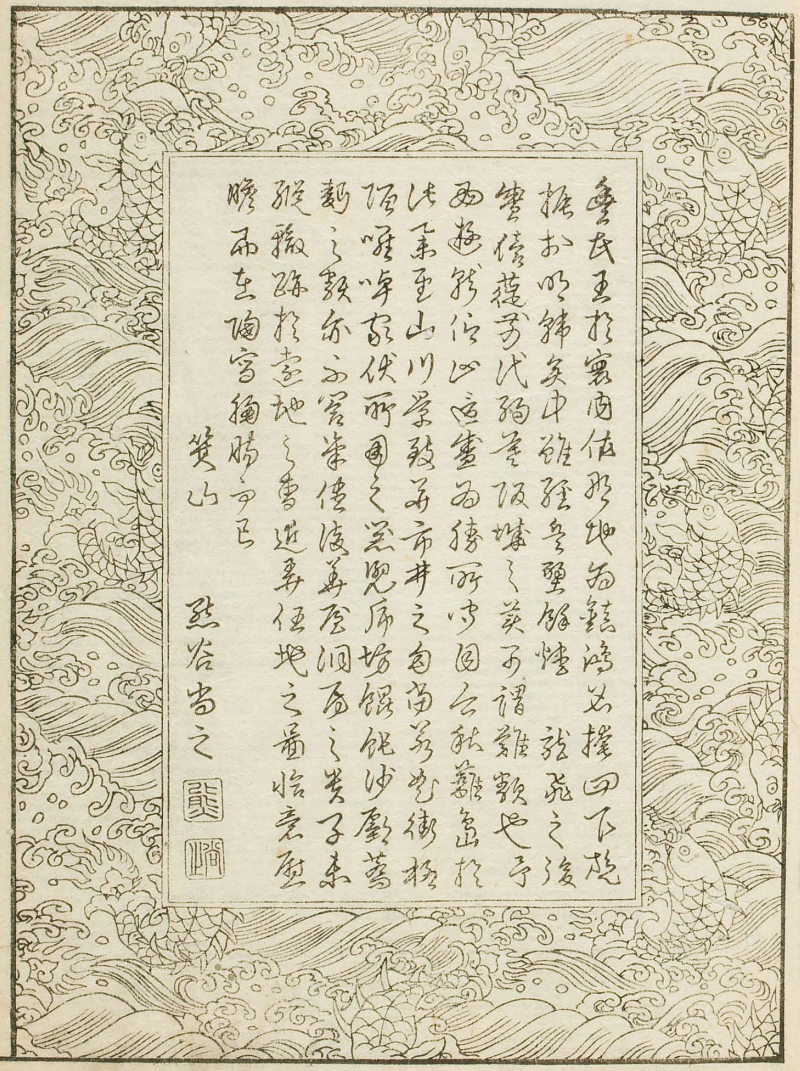
住吉郡

至未　西成郡　梶合東生郡

住吉大神　祭神　王出嶋　白鷺　和泉也多羅里　神木橋　便宜水　駐止石　社侍　御神詠　忘艸　住合社　長峡橋　稱和歌神義　忘貝　住合橋　祢海神記　忘水　楠大樹

火闌降祠　龍神山神跡　后土木　正印殿　嶋津忠久誕生石
津守家館　浅村上帝行宮　松栄亭　東西二昧堂　田嶺見七祖
宝殿之石　神跡一所　薬師堂　石塔婆　二層塔
氷鼎持堂　神宮寺　今王祠
什宝品目　五大力　鐘楼　講堂　浄土寺
不堂　津守寺　薬師堂　御田植
若戒石　弁財天　鉾洗石　頓使　宝物
六月潮湯　任吉年中行事　大祓
任吉細江　任吉浦
墨江　任吉園　任吉津
任吉畑　墨江池　津守浦　長居池
長居浦　長井濱　濱松原　出見濱　高燈燈
粉濱　楠嵜　浅澤　浅沢小野
龍橋　獨梁橋　慈恩寺　車庄橋　子安地蔵
牀菜菴古蹟　一休和尚墨跡　鷲住王古蹟　王子祠
任吉名菴　潮嵜　小町茶屋
任吉踊　関帝堂　遠里小野
難波屋松　霞松原

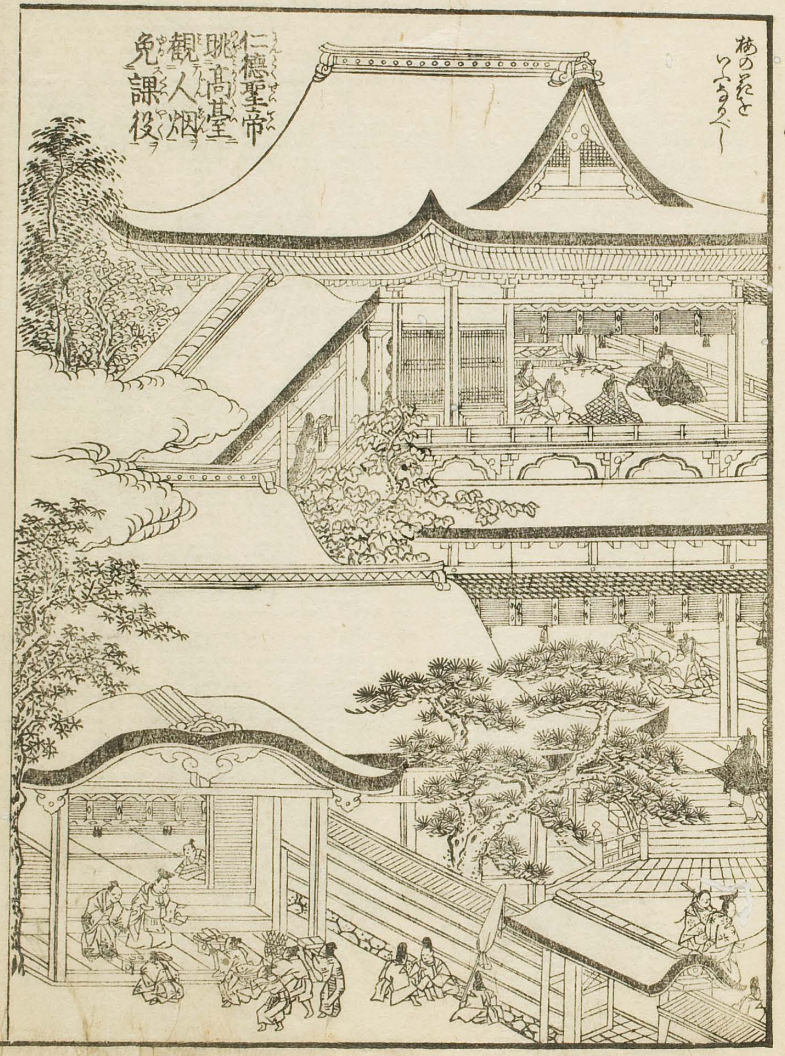
極樂寺　五成燈爐　玉手箱　吾妻
阿胡行宮　朴津　観音堂　薬師堂　護摩堂　大師堂
新大和川　大聖寺　五福天祠　牛頭天王　神功祠　什宝
淺香浦　任吉神輿燈脊所　淺香丘　稲荷祠
楠原神社　船玉神社　鷹耳部古蹟　茅津大歳神社
天満宮　西池　新家町　天下茶屋村　茶店
牛頭天王　紹鷗森　和中散廛　平野
大念仏寺　不退場　累世塔　熊野権現　長寶寺　田村堂　阪上家　轉輪蔵
合翠堂　同記　鎮守　観音堂　石表　安藤忠次墓
平野川　平野産物　恵光寺　齊堂　石表　全興寺　観音堂　古所　鉾配由来　仏文　仏舎利
田辺神祠　石池　平野産物　田辺法楽寺　鎮守　八幡宮
鷲住王家　大仏金村家　池田池



黃氏玉於寰內依形地面鑿為拱四下穩
拱如吹鞴矣中雖強弩堅鎧悉
雖倩蓋勇伐弱善攻堵之英可謂難類也予
西遊到伊川過雷西猪所守固台秋蘇盆於
伏羲至山川景致為市井之自為苗芳也徹拱
頂嵯峨高伏所用之器皆所坊銀鉈沙鬱蒼
翠之數尔而器崇德後每屋洞屋之类子來
驚飛於壺地之雷迸每位地之番恰意屋
曉而至陶宮猶勝之耳

黃山　　玄谷書之

龍 崎


梅の花とりてるべし
仁德聖帝
瑞高堂
觀人烟
免課役

高津宮
なにはつの
みやこのかたに
はるくれば
さくやこのはな
あをこりて
さくや
このはな
なにはつの
みやこのかたに
はるくれば
さくやこのはな
あをこりて
さくや
このはな
東宮なにはづに
御ぐしをふりわけ
つとめたまふ
三年ふるうち
ゆたかにして
たみまろ
ゆたかの
このたい

浪速國 摂津國西成郡の惣称なり今東生西成の二郡なり頃は大坂とりわけ難波津と雅波江難波浦波花潟かみは海等古称多し

新撰

なにはづにさくやこの花冬ごもりいまを春べと咲くやこの花

日本書紀曰

神日本磐余彦天皇戊午年春二月丁酉朔丁未日皇師遂東舳艫相接方到難波之碕會有奔潮太急因以名爲浪速國亦曰浪華今謂難波訛也此云奈磨盧

許

。されば神武天皇東の國を征伐しゆかんとて潮奔る浪速國とひしに浪華とも書しかの難波とも書しかの難波の

急なれば速なり図経に難波は浪速國と云ひしに浪華とも書しかの難波の

北へ入て半ばに入る萬葉集なる大伴宿禰旅歌の中に押照や難波の

國と称ずして是等なれば難波と称ずるなり

支那

なにはやなにはの國なる芦の葉の葉のうらにもかくれもなし　藤原伊輔朝臣

後拾遺抄奥政倉

摂津國 畿内五箇國の其一なり畿内とは王城なる畿さ内の邦として半なり畿内風俗の

半は後漢書。唐書。宋史。太平御覽。太平廣記。皇朝類苑。等なるべしなり又

大明一統志及大學衍義補に日本在東海之中古称倭奴國改曰日本以其近日所出也又

武備志曰畿内州五山城大大和大河内大和泉小攝津大統五十三郡

後拾遺

なにはづにあしのかりねの一夜ばかりかりそめにこそ思ひたちしか　紫式部

應神天皇の御宇初て摂津の國難波の萬國の海船あつまる集會せるの

義なり摂津萬船と称ひおさむるの頼津なりとも聚るの頼なり神代なる

大己貴命の御女下照姫天磐船に駕して此地に降臨ましまし

高津と號ずあれ摂津國の始えなり

難波高津宮は　仁德天皇又の名鷦鷯尊　即位の御時初る皇居なり營なる

所なり

抜萃して記次

抑此帝　應神天皇第四の皇子なりて

御母仲姫命五百城入彦皇子の孫と天皇幼なりし聰明叡智なりて特に

容貌美麗なり壯年なる速んぐ益仁寛慈恵なる坐次　應神帝崩じ

なる時第五の皇子菟道稚郎子を太子なる立て御位を譲んとの御遺詔

なり故なる此君大鷦鷯尊なる詔させなる此我なる第なりしく文獻不足なれ

ど天業に登ん半なりしかば大王の風姿岐嶷なりて仁孝厚し天下

の君となるなる足れり主昆の上なりしく季の下なる聖の君なりしく愚の臣と

なるの古人なり常典と顧ず帝位なる弟なる臣となるんと宣ふ大鷦鷯尊

對ず曰先帝なる立る半なり皇位一日も空しなるべしなる預明德なる

選ず寶祚を嗣民を接ず國家なる席ぞべし我先帝の命を棄ず第

王の額ゐ従ん やとく かつく辞〜昔玉ひ各相議りゆ〜年 郁く空位
こ載を経り時ゐ海人鮮魚を貢く菟道宮ゐ献に太子海人ゐ云我
天皇ゐ兆に貢を受ぎ渭ゐ〜とく色〜経波宮ゐ〜献を色〜
大鶴鶴尊亦色〜く菟道宮ゐ献〜む於是海人の鮮魚往還て
鰊もゐ故ゐ又他の鮮魚を献に相議ゐ年糸日のめ〜鮮魚も赤鰊も
海人苦く鮮魚を棄く大ゐ哭に太子の曰我兄の志ゐ奪ふべ〜に
豈々〜く生く天下を煩ぢんやとく終ゐ自死ゆ〜忠大鶴鶴尊
太子の薨ゆ〜〜来ゐ使ゆく経波宮ゐ菟道宮ゐ馳て大ゐ叫哭く
天ゐ仰き地ゐ外髪を解屍ゐ跨く数日慟泣〜棺ゐ伏〜ゆ〜
素服をきゆく菟道の山上ゐ葬をきゆ と称ト今宇治離宮八幡ゐ百済国
の書紀士王仁諫奏〜く曰既ゐ空位こ某ゐ建ぶ君の愁を天下の
愁こ早く登極ゐ〜〜めく民の煩を愈〜宝祚延長ゐ〜ぶ四海の安
きれゐぬんと頻ゐ勧きゆ 難波津の賀詠を献トゆ 於是

え年春正月大鶴鶴皇子即位〜ゆ〜難波ゐ都ゐ〜きれを高津宮
仁徳天皇と稱〜きゆ宮城の室屋ゐ弗亞色桶梁柱楹弗薄楞茅茨弗
剪齊〜く国政に私曲ゐく耕績の時を教ゆ〜
四年春二月羣臣ゐ詔〜く曰朕高臺に登つく遠く望ゐ烟氣絶ぢ
思〜ゐ域中百姓既ゐ貧〜て家ゐ炊事ゐ〜朕聞古の聖王乃代ゐ
萬民德の恵ゐ頒布て家々富平と旅〜今朕億兆ゐ臨んく三年ゐ
わりぬ頃者餘炊烟ぢく〜疎之今歳五穀不登〜て百姓窮民
封畿の中ゐ況や畿外諸国とやと寡〜同年三月 詔〜く曰
今より三載ゐ至るまて悉課役を除く百姓の苦ゐ息〜ゆ〜是日より
始て繭衣鞋屨弊盡ざれど更ゐ易ゆ〜ぶ温飯煖羹酸餡をれど
易ぢ心を削志ゐ約く文業をりし〜ゆ〜因是宮垣崩ぢども造ぢ
茅茨壊ぢども葺ぢ風雨隙ゐ入りく御衣を沾〜星石漏壊れ
入りく寒ゐ床蓐〜是后風雨時ゐ順く五穀豊穣こ稔の間ゐ

仲正

百姓富寶と成り德既に滿ち炊烟も亦繁し

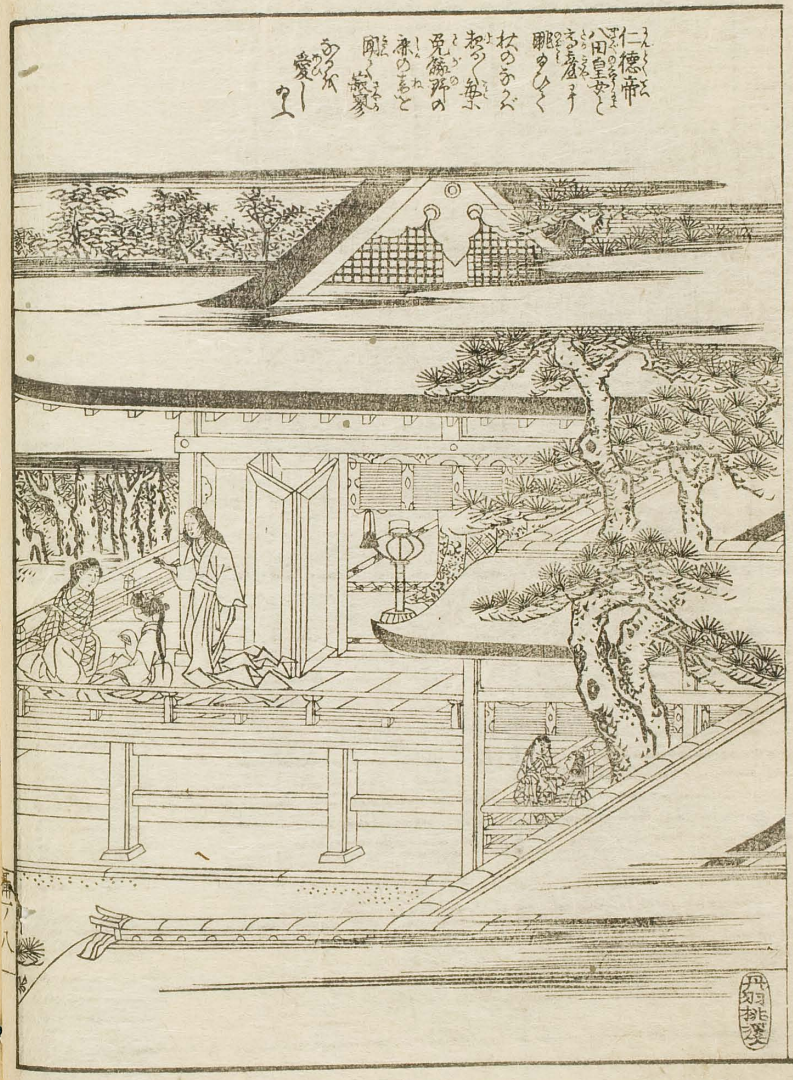
七年夏四月　天皇臺上に居て遠く望みたまふに烟氣多く起り是日皇后に詔て曰朕既に富を豈愁あらんや皇后對て曰何を富とやせん聞くや天皇曰烟氣國に滿百姓おのづから富り皇后又言へ宮垣壞れて修理なく殿屋破れて夜被露ん何を富とせん天皇曰其天の君たる事は百姓の為なり然る則は君は百姓を以て本と為す是以古の聖王は民一人飢寒すれば顧て身を責今百姓貧き則は朕が貧きなり百姓富る則は朕が富なり百姓富て君の貧はいまだあらざる同八月貢を免し特に二年に限りて宮殿朽壞を府庫已に空し今百姓富饒にして里に鰥寡の者なく仍貢を免して宮室を修理せしむ其罪は天に獲と

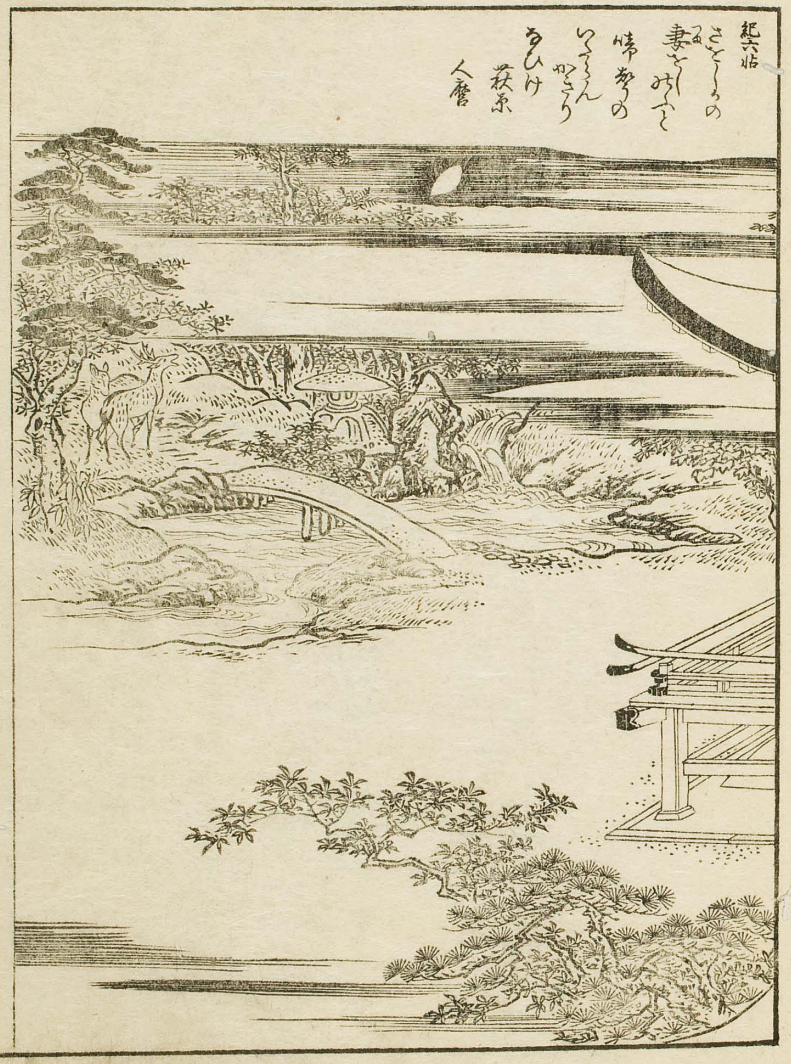
十年冬十月南て貢を捧て宮室を構る百姓老少を引て材を運び簀を負日夜を問ず力を竭しいまだ幾時あらざるに宮室悉く成ぬ於是聖帝勅して稱やと

十一年夏四月群臣に詔して曰今朕が國は多く郊澤曠遠にして田園少乏し且河の水横に逝て流末駃なり屢霖雨に逢へば巷里に海潮逆上て禾稼道路に遲し故に羣臣に命じて流を海に通じ逆流を塞ぎ田畑を全し冬十月宮の北の方の郊原を掘て南水を引て西の海に入しむ是を堀江と云

十四年冬十月猪甘津に橋を架し其所を号て小橋と云是茅渟道の中に作て南の門より直に丹比の邑に指す又大溝を感玖に堀て石河の水を引て上鈴鹿下鈴鹿上豊浦下豊浦四處の郊原を潤し四萬餘頃の田を灌ぎ得たり故に其所の百姓實饒みて凶年の患なし

十七年新羅朝貢を闕す秋九月的臣の祖砥田宿禰小泊瀬造の祖賢遺臣を遣して闕貢の事を問しむ新羅人懼て貢献る調絹一千四百六十疋及種々物并て八十艘


仁徳帝
八田皇女と
聞ゆ
松のおぐ
恋籠所の
兎の毛と
鳳凰の羽
愛し


延六帖
さとりの
妻をしたひて
情多の
いくたくん
萩原
人麿

三十年秋九月皇后本國に遊行しまして、熊曾の岬に到りて弟其所の御網纒を取りて船に載せて還りまして、是日天皇皇后の不在を伺て八田皇女を以て婚せ宮中に納れまして、時に皇后雜波の濟に到りて天皇八田皇女をめしまして聞きて大に恨て、其捧げ持ちて御網纒を海に投入れて、故に時の人散纒する海を號て纒の濟といふ又其地を号て御津の前といふ雜波を御津と初めあり

三國史記曰　此書者記新羅高麗百濟三國事有五十卷所謂與東國通鑑粗有異同已下西峰松下見林編集之出異稱日本傳

訖解尼師三十五年春二月倭國遣使請婚辭以女既出嫁今按三十九年當日本仁德天皇三十二年與通鑑異

同　今按三十六年二月倭王移書絶交鑑同　今按三十六年當仁德天皇三十三年與通同三十七年倭兵猝至風島抄掠邊戶又進圍金城急攻王欲出兵相戰伊伐飡康世曰賊遠至其鋒不可當若緩之待其師老王然之閉門不出賊食盡將退命康世率勁騎追擊走之今按三十七年當仁德天皇三十四年

三十五年冬六月皇后磐之媛命筒城宮に薨ります（筒城宮は山背の國にあり）

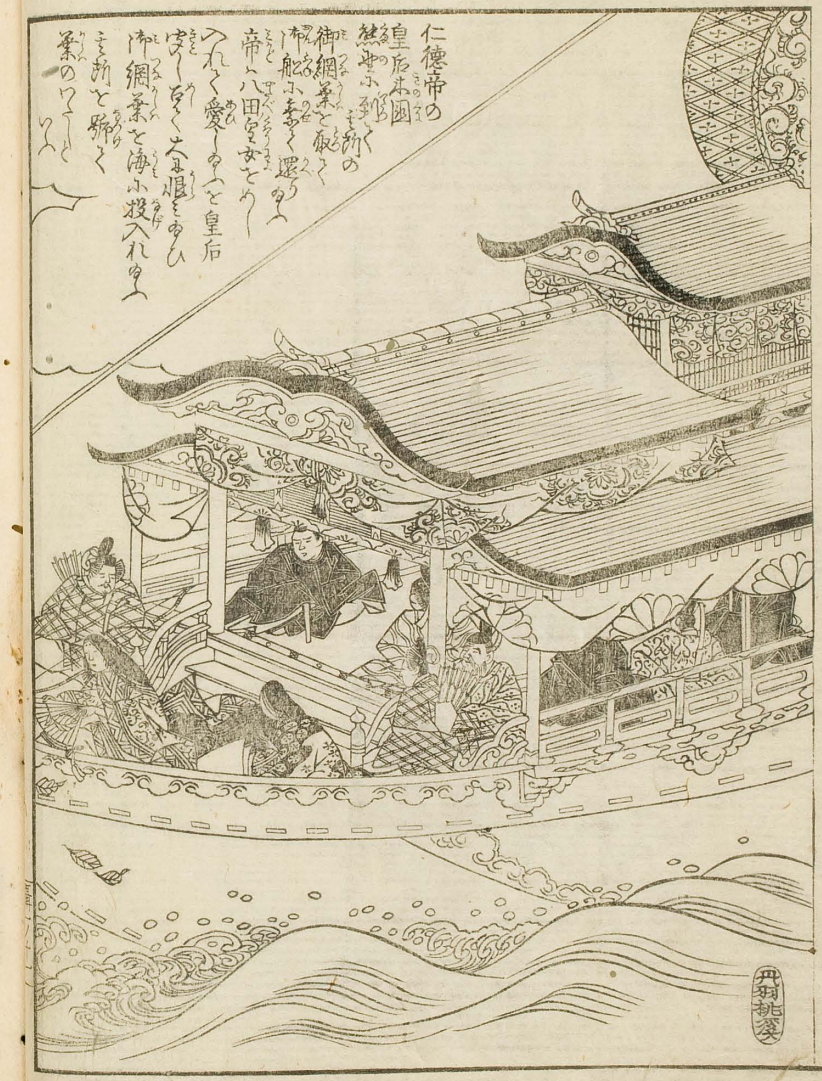
三十八年春正月八田皇女を立て皇后とす秋七月天皇皇后と俱に高蓋の岸に避暑ます時に毎夜免鐵野より麻の音聞ゆ其聲寂寥みて悲しく共に懼の情を起します月盡に遣て麻の音を聆ず天皇皇后に語て曰是夕麻の音かしかの由あらんや其明旦猪名縣佐伯部臣苟賦を獻ず天皇勝手に問しまして（其苞苴の中に牡麻を對て言まれ牡麻を何ぞの所の麻を免鐵野と名ふ（時に天皇問まれ必知ら怪しき麻あり皇后に宣て朕比懷抱麻の音を聞く慰ものと今まれ推ふに佐伯部を獲る麻を日枚野に生て妻子麻の音を聞ゆ彼朕を愛る事深きを以て適遠に獲られ事の限りを哀て宣て故に佐伯部皇居に近く事を有司制しく安養國の淳田に移郷す今淳田佐伯部の祖之俗云昔者人有て往く免鐵野に宿りて附ふ二の麻倭に外次將又鷄鳴に牡麻牝麻に化て吾を及に房事をして白鶴多く飛て吾身に変まれ何の祥ぞ牡麻答て汝の出

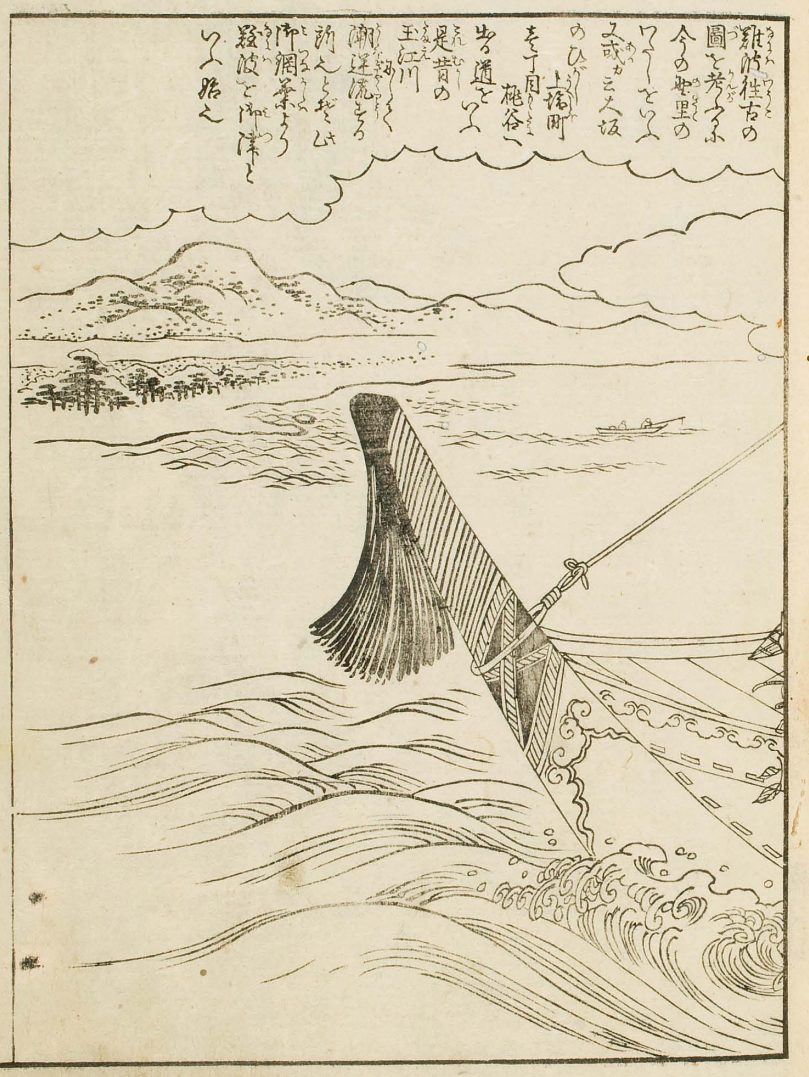
ひ所なく必人の為に射られて死ん邪白堤と其身に塗まん出れ霜の素は應
あり時に病人心の裏に異しと思ひ未昧爽に及ぶに獵人牡麻を射て殺しつ
是以時の人諺云鳴牡麻も隨相夢ゆ
二十九年夏五月始て詔ありて菖蒲を獻ぜ 和漢合運
四十二年秋九月酒君公鷹を造らしむ百舌鳥の野に放ちて遊獵し
給へ 妻以下任吉郡鷹耳邑小
五十二年新羅國朝貢せざりし毛野の君は祖竹葉瀬を遣して擊しむ
殺百人を殺し四邑の人民を虜にせり

同巻第三 新羅本紀云 「中巻東晉興寧二年當」
奈勿尼師今立九年夏四月倭兵大至王聞之恐不可敵遣草偶人數千衣衣持兵列立于吐含山下伏勇士一千於斧峴東原倭人情衆直進伏發擊其不意倭人大敗走追擊殺之幾盡
今按九年當仁德天皇五十三年與通鑑同

五十五年 遣使を田道に遣しく擊しむ
五十八年夏五月荒陵の松林の南北道に當りて忽兩の歴木路に横ぎ

未合ざる同年十月呉國高麗國相並に朝貢を獻る
六十二年夏五月遠江國の司表に上りて曰大樹あり大井河より流れて河の曲
に停る其大十圍布一丈に余る時に倭直吾子籠を遣しして船に
造しめ南海より運しめて難波津に將來せり船に宛て是茅渟の縣田
大中彦皇子闘鶏に獵を好む皇子山上より眺て聖帝を瞻望し給へり
其形盧の如し仍て使を遣して問て云其聖帝に云はるるの如の窟を啓て
曰氷室なり皇子曰其中に藏ると如何のあるぞと土を丈に掘て草を其上に
蓋ひ敷て茅萩を敷て氷を其上に置既に夏月を度へて泮に其由を奏す邪
熟月に當て酒に漬て用ひ皇子則其氷を將來て御所に獻る天皇
大に歡び是より已後年毎に季冬に必氷を藏む是氷室の始なり
天皇夙興夜寢輕賦薄斂し民に德を蒲布惠を施し困窮を振ひ
死に弔ひ疾に問孤孀を養ひ是に因て政令に流行しむ天下
太平なり二十餘年無事なり


仁德帝の
皇后本國
然也小
御網業と
帝ハ八田皇女と
皇后
御網業を海ハ投入れ
業の


難波往古の
圖と考へ
今の世里の
上塩町
桃谷
玉江川
難波

同三十八年夏五月倭人來圍金城五日不解
將士皆請出戰王曰今賊弃舟深入在於死地
鉾不可當乃閉城門賊無功而退王先遣勇騎
二百遮其歸路又遣步卒一千追於獨山夾擊
大敗之殺獲甚衆　　通鑑

又　　卷　　爲三十七年事　　當仁德天皇八十一年

辰斯王　　第二十五百濟本紀曰　　支爲質　　今按當仁德天皇七十八年

六年夏五月王與倭國結好以太子腆

西晉大元十五年當

腆　　十　　今按當仁德天皇八十一年五月遣使倭國求大珠

支　　十　　今按當仁德天皇八十三年

今按直或支云　　十二年春二月倭國使者至迎勞之特厚

腆支王　　梁書名映阿莘之元子阿莘在位

第三年立爲太子六年出質於倭國十四年王

薨　　仲弟訓解攝政以待太子還國季弟碟禮

自立爲王腆支在倭聞訃哭泣請歸倭

殺訓解　　百人衛送腆支至國界漢城人解忠來

王以兵士　　碟禮殺兄自王願太子無

告曰大王弃世王弟　　依海嶌以待之國人殺

輕入腆支留倭人自衛　　夫人生子久尔辛

碟　　禮迎腆支即位　　八須十世王也日本書紀曰

今按直支百濟第二　　月百濟人未朝十六年

應神天皇八年春三　　天皇召直支王謂之

春二月百濟阿花王薨

八十七年歲正月十六日天皇崩ぜ十月百舌鳥野陵小墓に葬り奉る　今の

大仙陵　　聖壽百十歲

王業

日汝迓於國以嗣位仍且賜東韓之地而遣之明本林按直九年支在二十五年百濟直支王薨即子久爾辛立爲王年幼大倭木滿致執政國政與王母相姦多行無禮天皇聞而召之

勅勅

なつそびくかぶかぶとのそなるる高津の宮に宮のあけかの　　百濟隆信

金業

いまゝの經波の半ばに出でし高津の文の匂ひ梅ぐうえ　　賢通法師

參議師賴

世に聖帝の御代ぞ耳落其座小參體泉其唐に流れ鳳凰其樹小巢ひ

黃龍其沼に遊び麒麟其囿に臻て神雀其林に棲是こそ皇德乃

祥瑞なれ天下清平の代ぞ我　　仁德帝の舍人親王特に懇毫と

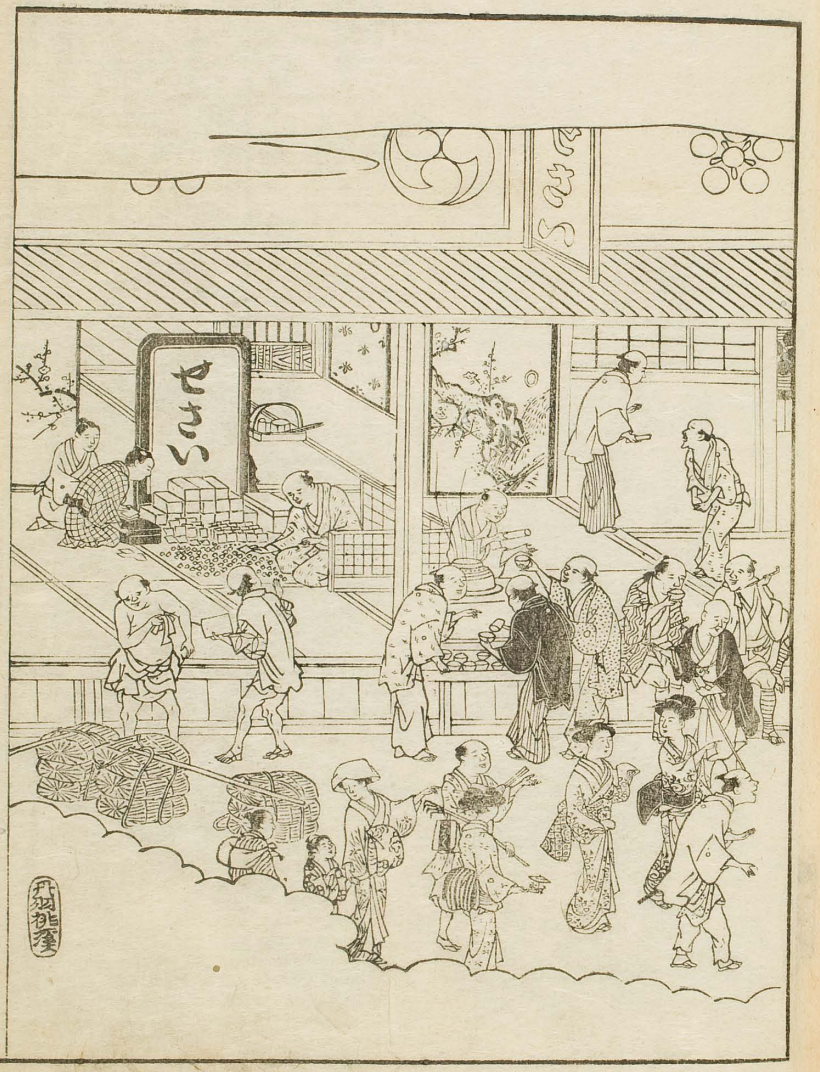
深き恩に分明に聖帝と賞じ　　桓武帝の來師平野神社に崇

め百王の冠とし世に太平に賞ぜる言葉に遠き中務の堯舜

の代といふも迫き我　　仁德天皇の御代に比すべきにあらず

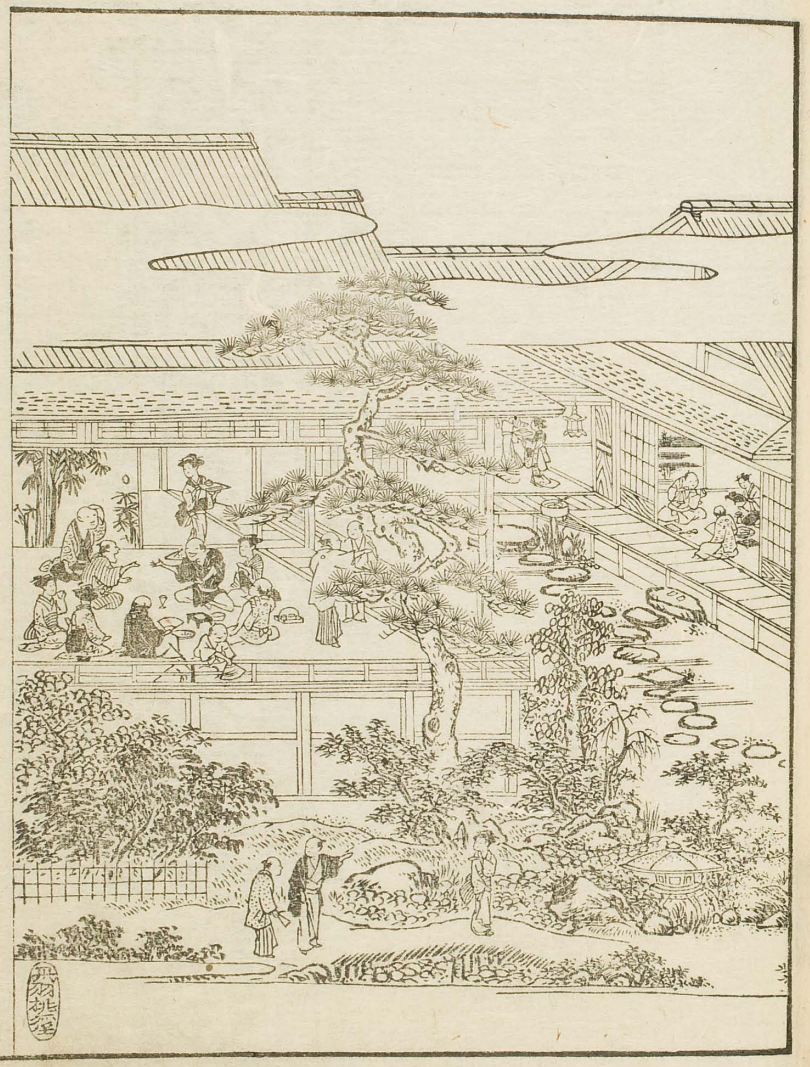
くて
聖天
清水
天安石
天神社
肉神祠
空書堂

天下茶店邑
天神祠
紹酪巷
茶亭
聖天山

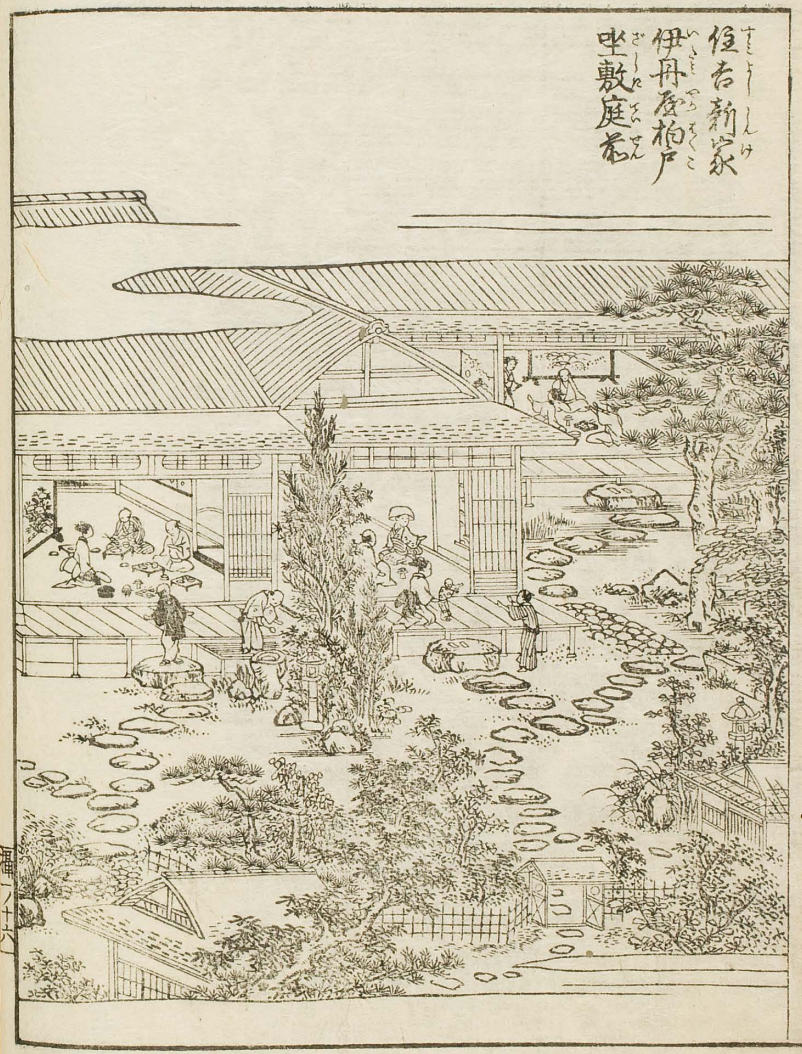

せさい

天下菓屋村
是齊菓店

住吉新家
三文字屋
貨食店

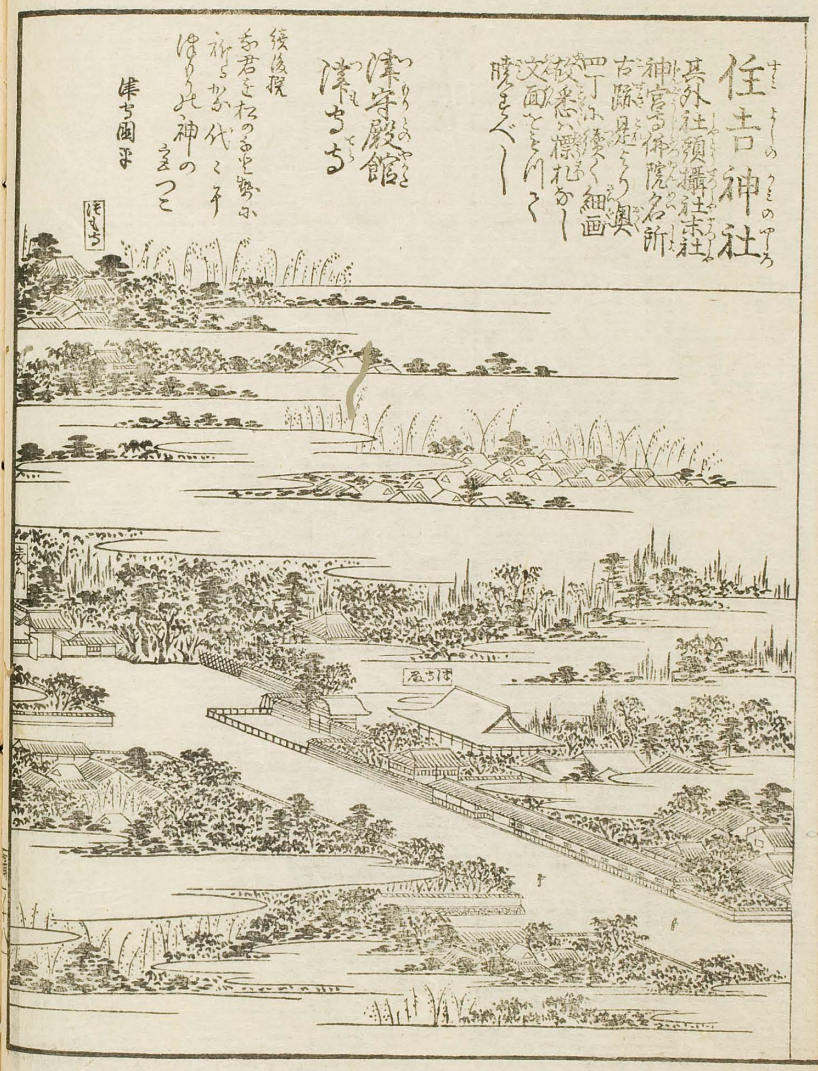


住吉新家
伊丹屋柏戸
座敷庭前

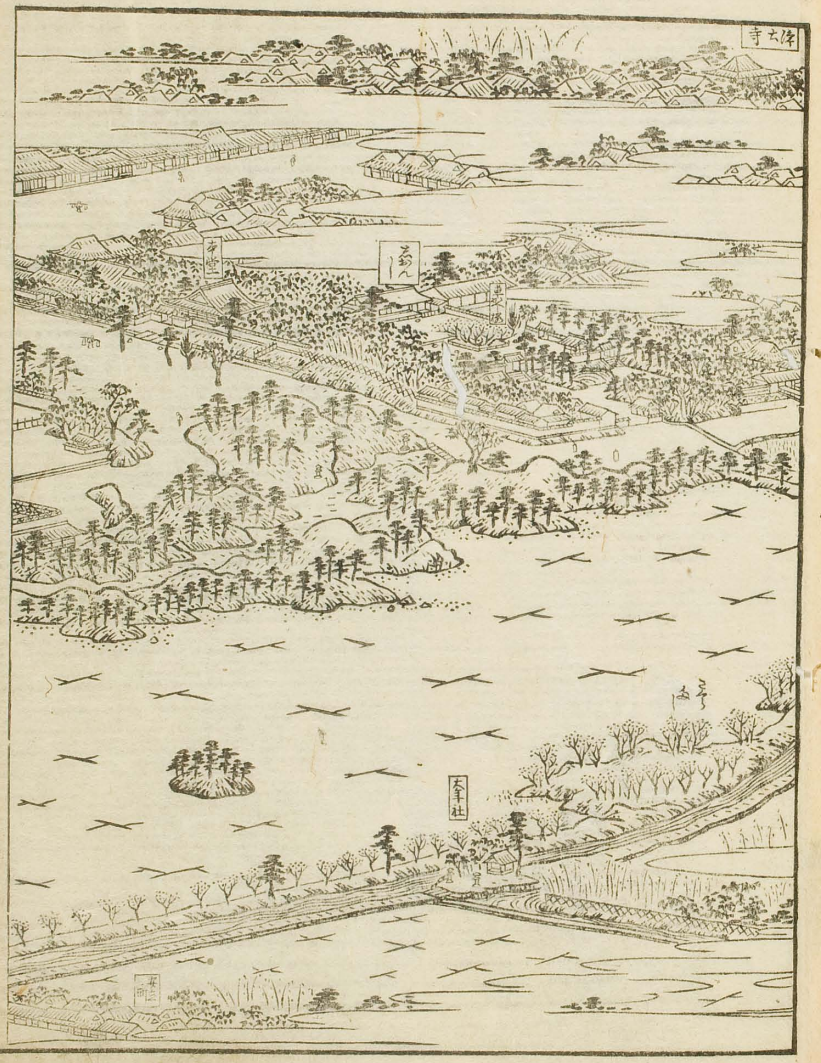


大隅宮　應神天皇の離宮なり按小淺水　仁德天皇
天宮公汎池を掌りしと見えて
長柄豐崎宮　孝德天皇の皇居なり古蹟は西成郡
和名抄莊村なり今小祠あり
万葉集歌上畧　あしべ　向ふ　なにはの長柄の宮の直木柱　下畧　笠金村
万葉集歌上畧　いにしへの長柄の宮の柱もか　橋柱とも朽果る世を　公朝
味經宮　同帝の離宮なり古蹟　仁德帝故宮の地なり摂津志に
出國志に味經郡味舊村其故趾と書しに謬あらん
万葉集歌上畧　見渡せば　なにはの宮ゆ　あちこちの　人もとめとあるぬるも
田鶴のかくれ　なにはの宮に神留ます　味經の宮に月は照かも　藤原廣覺
天武天皇六年冬十月摂津職を置天平十六年二月難波宮に遷く定く
皇居なり天同十七年復平城宮に還り延暦十二年三月摂津職に
罷く國司に天長二年二月江南四郡を以て和泉國に謙次夏四月國
法に豐崎の郡家以南に遷し国七月江南四郡を本國に還し兼和十一年
十一月法臚館に遷く國府に建武年中に内守楠正成兼て本國を守る
延元に赤松範資に西の地を採略し文和元年に佐々木秀詮これに代る

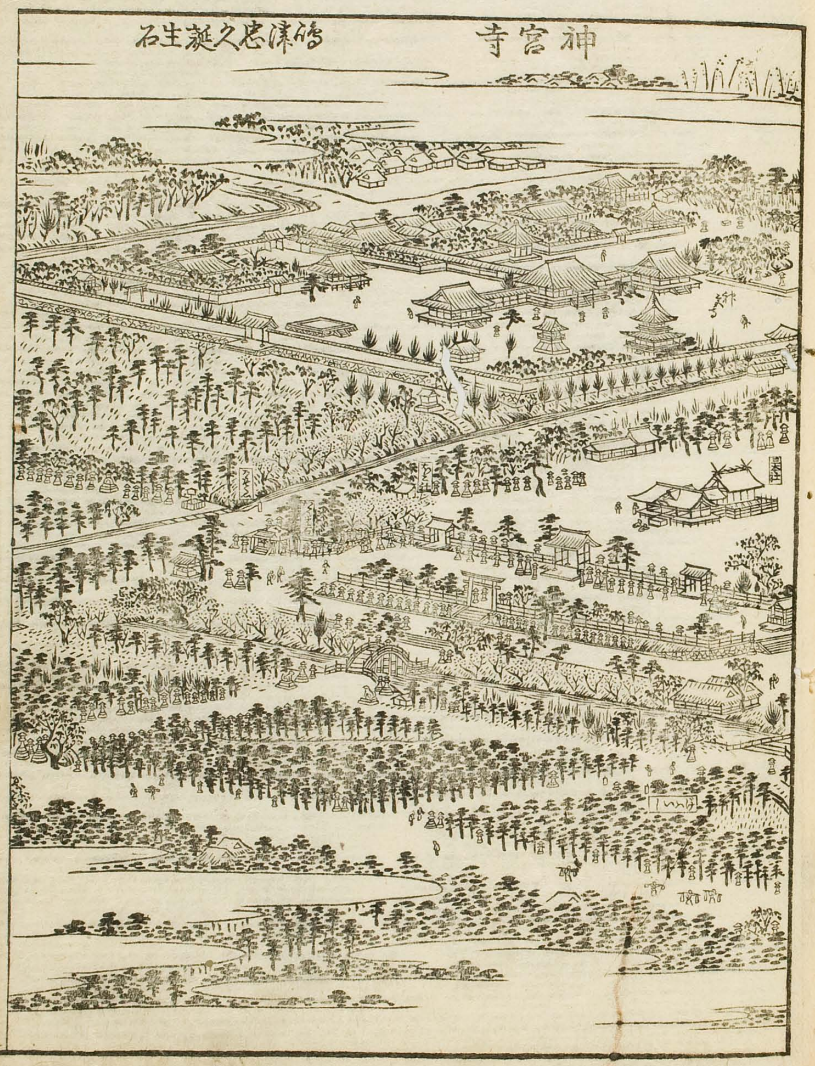
應永七年細川頼之守護て兼る厥后乱國となる諸侯威を爭事凡て
八十四年明應中蓮如上人本願寺を大坂に建て正の初顕如上人城となし次
織田侯諸將をして攻る天正十三年豊臣閤其城を盛拓して住居し
延喜式曰摂津國十三郡　任吉　百濟　今名慶しく任吉東生の二郡に入
百濟郡の名あり　東生　上古難波　西成　上古難波　嶋上　嶋下　豊嶋
今嶋郡の名あり　東生郡　西成郡　嶋上郡　嶋下郡　豊嶋郡
已上三郡上古澤く　河邊　武庫　日本紀　菟原　八部　或八田部　有馬
三嶋と云
能勢　和銅六年九月摂津職奏に河邊郡以佐々村山以遠隔て遥
跨嶮難る由是大寶元年始て館舍を建て雜務公文郡郷に
雜稲十一萬束　見稲簿曰米三十七萬二千二百七十八石八斗七升
抑當邦は海陸の都會天下の要衝なり西州の喉口　皇州の國域
なり群岑石に繞て平野左に連る淀水内に貫き江海外に抱く
山川の明麗田野の壤腴海濱の廣斥澤國の佳致なり住國
小敬すべし

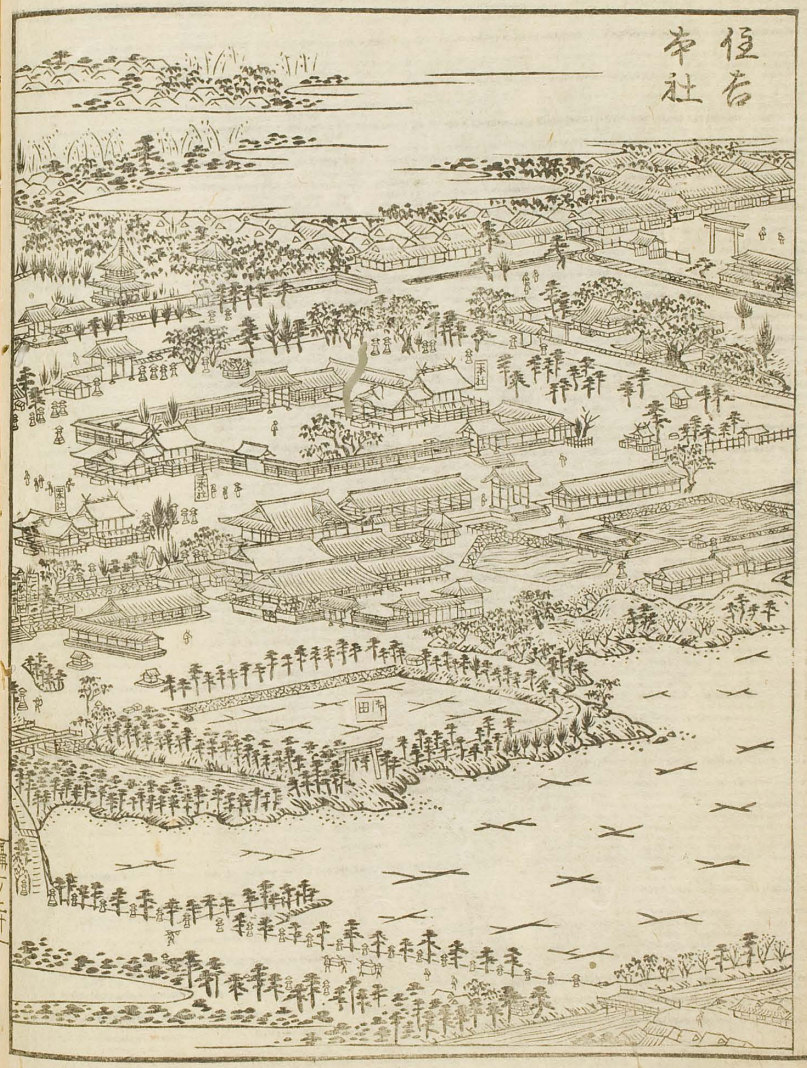

住吉神社
其外社頭攝社末社
神宮寺保院名所
古跡是こそ奥
四丁ほどなく細画
絵悪く標れかし
文面ときりく
時をぐし
津守殿館
津守ちる
後鳥羽院
御君をわのまと寄ほ
祈りかな代こそ
ほりよ神のえつこ
津守國基

古今六帖ほ
かきたとりの題そ
秋やそた夜や
うらこやこなの
ゆきのあひの橋ほ
おもやおくらん
けふかな初雁ほかきたを
ゆたあひ
の橋なゆたあひのはり
と絵しく住吉の
神宮寺の新書しく
神祇の部ほられる
いろのゆくそちだ
をみよしやくのおも
もおりられさるや


浮土寺
大歳社

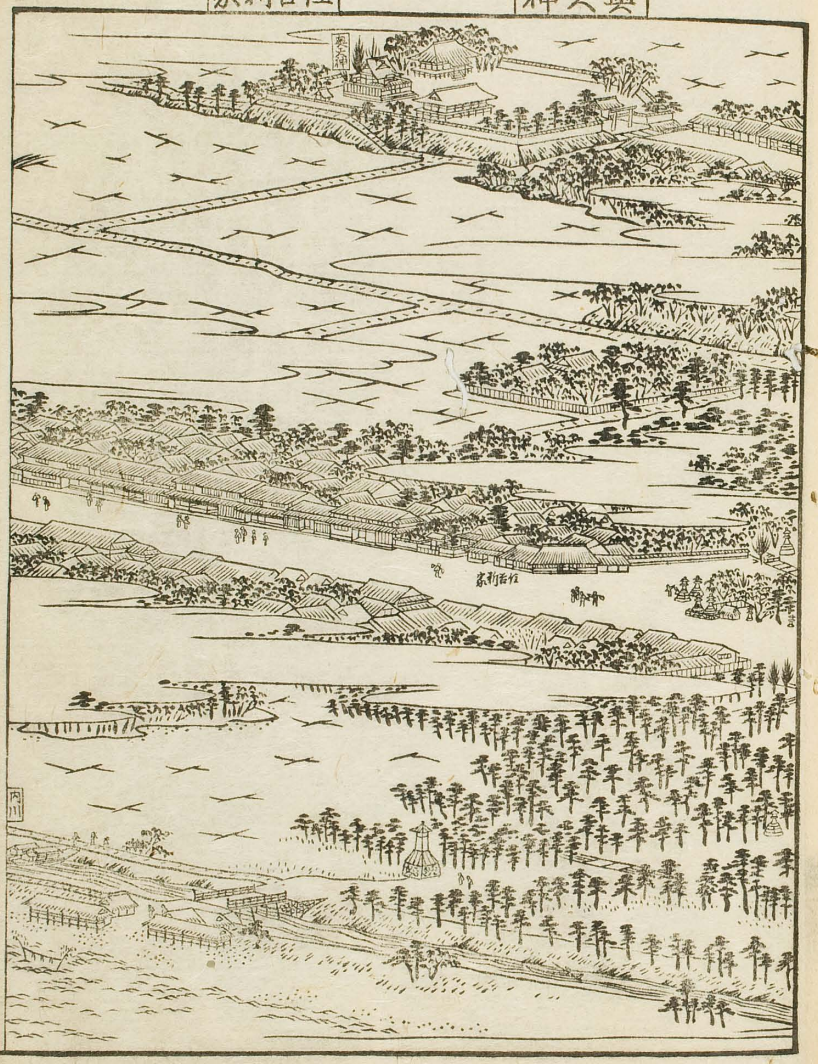
東叡山
浮土寺
大歳神
墨江祠
江映寒松相與
清松間殘雪
玉壇明春風
吹客歸心劇
生怪岸邊萱
草生
八和巻


神宮寺
碍津忠久誕生石

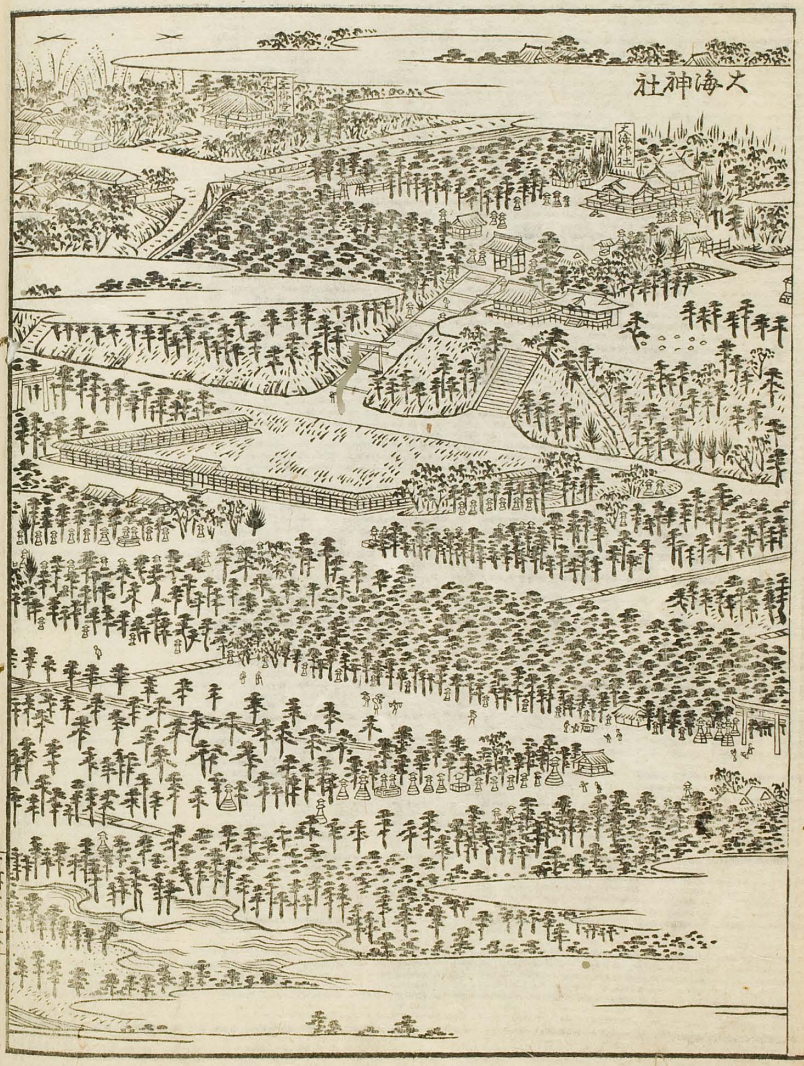

住吉
社
本社
本社
田

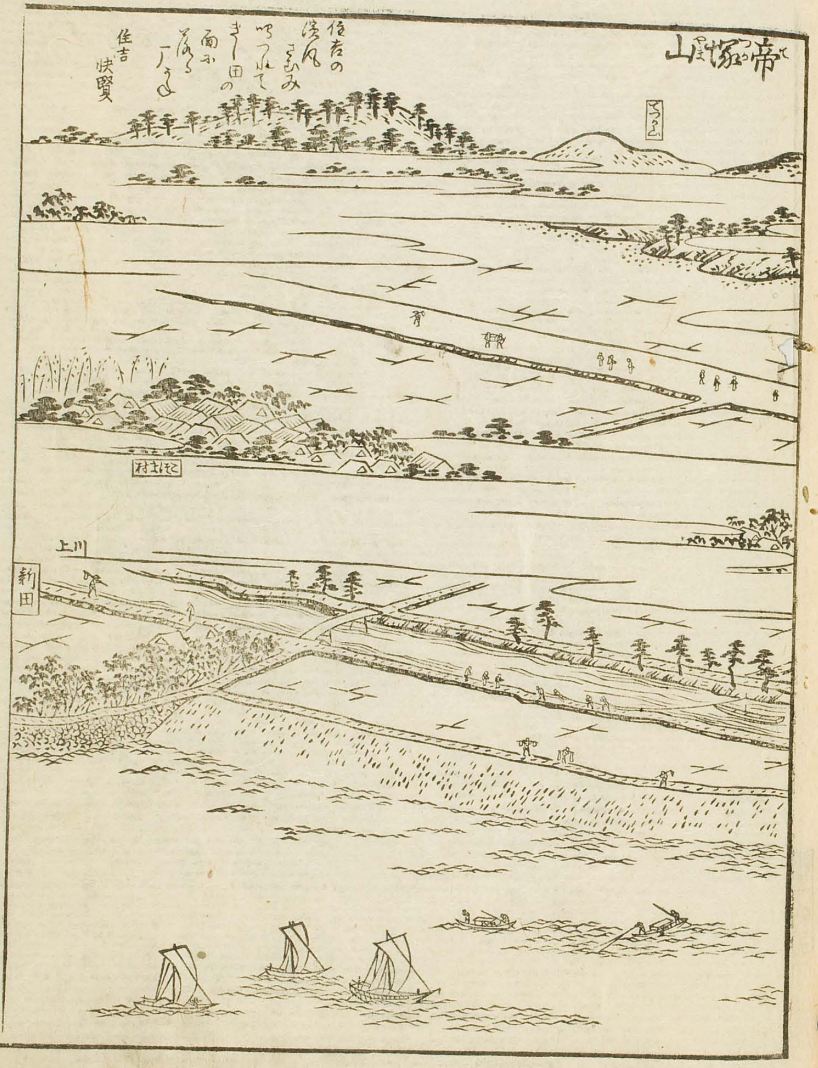
奥天神

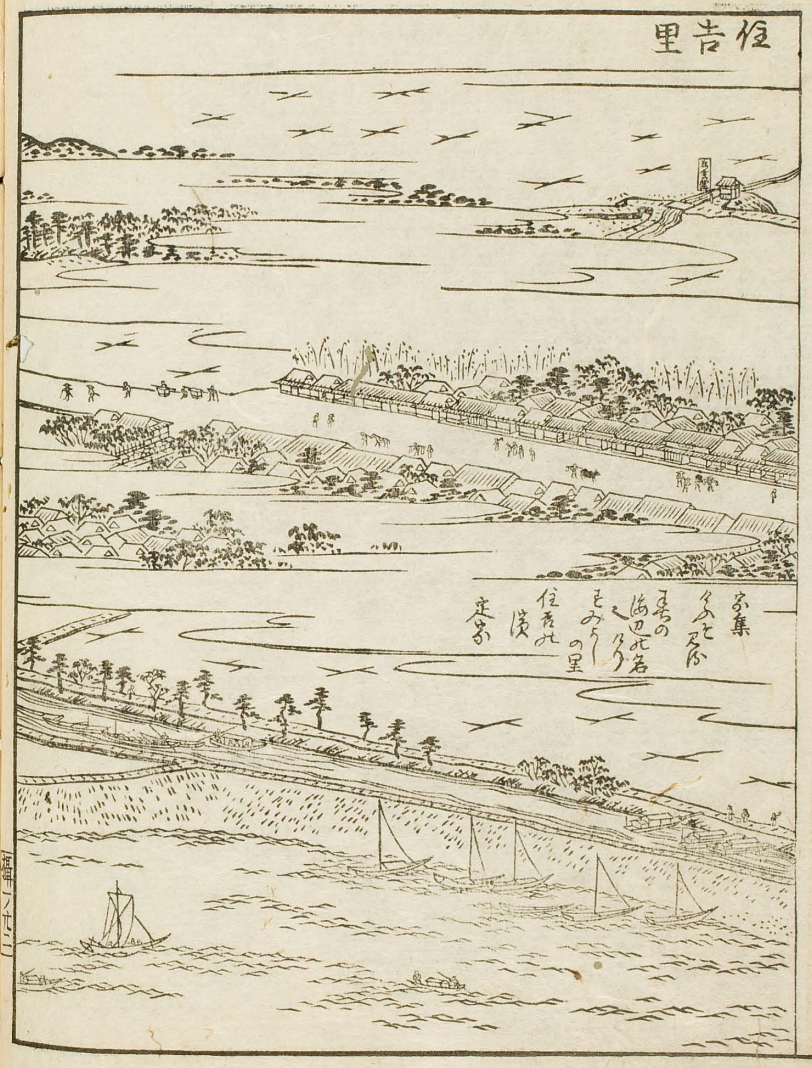
住吉新家



大海神社




帝塚山
住吉の
住吉
快賢
村主村
上川
新田


住吉里

住吉郡 東は摂津丹比八上三郡の界に至り西は海濱南は和泉大鳥郡の界に至り北は東生西成の二郡の界に至る

住吉大神社 住吉郡ふるの延喜式云住吉坐神社四座 名神大月次相嘗新嘗

續古神祇

遠の海やあそびたつらんの沒るらんしかの一住吉の神 卜部兼直

祭神 一神殿 底筒男命 二神殿 中筒男命 三神殿 表筒男命 四神殿 神功皇后

日本紀曰 伊弉諾尊既還乃追悔之曰吾前到於不須也凶目汚穢之處故當滌去吾身之濁穢則往至筑紫日向小戸橘之檍原而祓除焉遂將盪滌身之所汚乃興言曰上瀬是太疾下瀬是太弱便濯之中瀬也因以生神號曰八十柱津日神次將矯其柱而生神号曰神直日神次大直日神又沈濯於海底因以生神號曰底津少童命次底筒男命又潛濯於潮中因以生神號曰中津少童命次中筒男命又浮濯於潮上因以生神號曰表津少童命次表筒男命凡有九神矣

古事記曰 其底筒男命中筒男命表筒男命是即住吉大神矣云云 底筒之男命中筒之男命上筒之男命三柱神者墨江之三前大神也 同巻云 天照大神之御心者亦底筒男中筒男上筒男三柱大神者也 此時其三柱大神之御名者顯也云云

同記曰 神功皇后御船之波瀾押騰新羅之國既到半國於是其國王畏奏言自今以後隨天皇命而爲御馬耳毎年雙船不乾船腹不乾絙檝共與天地無退仕奉故是以新羅國者定御馬耳百濟國者定渡屯家尒以其御杖衝立新羅國主之門即以墨江大神之荒御魂爲國守神而祭鎮還渡也

古今倭人傳云 伊勢神宮云 むかしはかりの世住吉はきしの松いく代経めらん

我見ても久しくなりぬ住吉はきしの松いく代経めらん

嗣疑抄云 文德天皇天安元年正月廿八日りきとしつらの國史實録にも見へたり又此歌は文德帝の御製とつたへあれども信用しがたし業平の歌と見るべしたく

拾遺 あらたふと神代のあとをたづねてもあふぎぞ尽きぬ住吉の松

夏屋法師

新古今　又伊勢物語云　おほん神ぐらうしゆひ

むかしとあるこの波瑞籬はなれて世ようやくはじめて

賀茂真淵云現形〳〵ひてとく今の神は冥顕と佛神現接化而と古事ふみの文れを形も

あやまるなり〳〵ん又ふ所へ真淵の議論なり〳〵伊勢物語の古意の抄も要〳〵

新後拾

橘の小戸は汐瀬もあらねくむ〳〵なり〳〵神なをふ神　津守國基

拾遺

あはなるなり〳〵人〳〵のあひおもをたりはなく〳〵住吉の松　安法法師

住吉明神〳〵

まふ大神の子平振神代の沖時日向國小戸の橘は檍原より現はるひく

尚社の沖鎮坐　神功皇后紀十年辛卯四月廿日と必　帝王編年集成　故ゆ今は

至く卯月上卯日の例あるまゝ四の神殿は宮造の皇后と韓沖退治の時

尚社軍神ゆれ宮造の体諸社小混ぜ其満ゆ之社をくむ奥鏡の

徒一社ひく〳〵鶴翼の圍と家〳〵所謂八陣の法ゆれ住吉造とゆ四の宮居

四方ゆ立瑞籬四維ゆ圍を攝社末社千餘所巍然〳〵遷ゆ神人二百

餘家軒を双べ整〳〵ゆ諸人陸時と擬ゆ間断ゆく岸の根松蒼々やしく

君子の操と擬〳〵神樂の音楽の声神馬の嘶穏ゆ〳〵四海の波風穏ゆ國家

と謐〳〵社稷と輔け玉の日陸〳〵ゆ和光満の月皆〳〵照〳〵四海同塵乃

雖ゆ隨縁利物の光鎮ゆ薫次抑尚社の沖神躰ゆ九神一神の傳とゆふ事

あり伊弉諾尊の心化ゆ爰〳〵之直日神直日八十柱津日ふ之神を日道之

天の天日ゆ則天照を神ゆ又底津少童中津少童表津少童表之神ゆ

月讀尊ゆ〳〵則攝ゆの埴生花翁豊玉彦櫛田彦の案之底筒男中筒男

表筒男ふ之神〳〵金氣造化の神ゆ〳〵素盞烏尊ゆ之一神之神之神

九神九神一神と申次ふ一神ゆ則伊弉諾尊ゆ牡尊の心化則右の九神

ゆ神代の事は九神とゆふ事とゆ尚沖ゆ之神傳ゆ〳〵とゆ神人

秘〳〵ゆ沙〳〵〳〵語〳〵ゆれ之事秘ゆ

新古今　住吉の濱は真砂とゆむ鶴ゆ〳〵ゆ千代ゆ

新拾　ゆく〳〵ゆの神の宮居の成ゆ〳〵ゆ古〳〵ゆ住吉の松　伊勢

後撰　ゆ〳〵ゆ〳〵ゆの沖ゆ社ゆ〳〵ゆ天ゆ〳〵ゆ千ゆ〳〵ゆ社神　為家

奉幣使　大宰權帥　伊房

新古　住吉〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ荒ゆ〳〵ゆ神ゆ〳〵ゆ待〳〵ゆ　津守有基

住吉の濱松のえふ風ゆ〳〵ゆ波ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ　藤原通俊

新後撰　神よ神ゆゑ住吉の岸かの芳野の世まで祈る宮柱かな　太上天皇

○住吉大神を和哥の神と稱し奉る代々の帝鑾輅をめぐらされし事ある事其例少なからぬ歟之部にて其幣使の立せ給事歟世を惠まし給ふ歟真圓三位若の神と和哥れ伊勢神尊の心化なり現ぜ給ふ御神なれば和哥の神と称する事神代よりの事也

新古　我道なれば住吉をまもるらんとそひかねと住よりの松　定家

新後撰　和哥の浦は道とは捨ぬ神なれば表をかけよ住吉の波　俊成

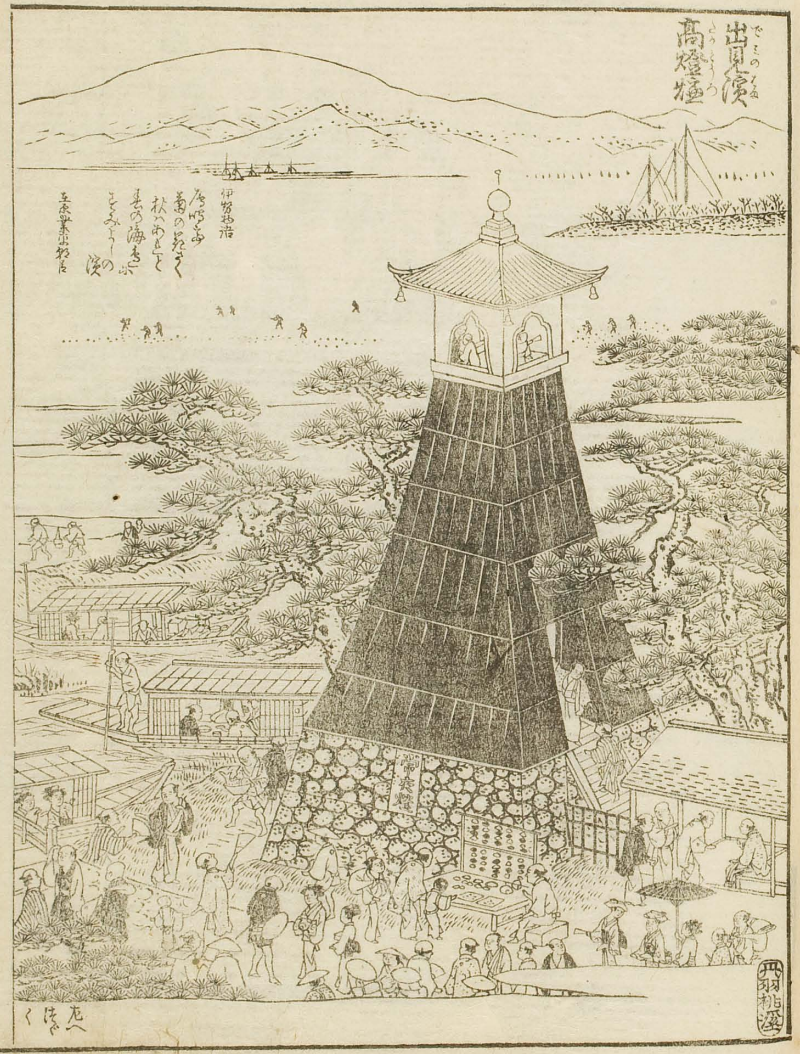
新後拾　ちのゆみをはそこなはそこなはしも道とはかつまもれすみ吉の神　等持院贈太政大臣

○當社と海宮との事神代の事に塩土老翁老父出見尊に教て忽海神の宮に至りて其宮は雉堞整頓臺宇玲瓏たり其庭一の井あり井上に桂木あり尊其樹下にたたずみ給ふ一の美人あり豊玉姫と則ち海神の豊玉老翁命と其側に老父出見尊塩土老翁豊玉姫一扉の社あり桂樹の當社の神なり塩土老翁の勅當社の再興ありて老父出見尊に說て海中に入給ふ其時いにしへ住吉の神名あり之を出嶋龍宮の神井の海宮の門前の

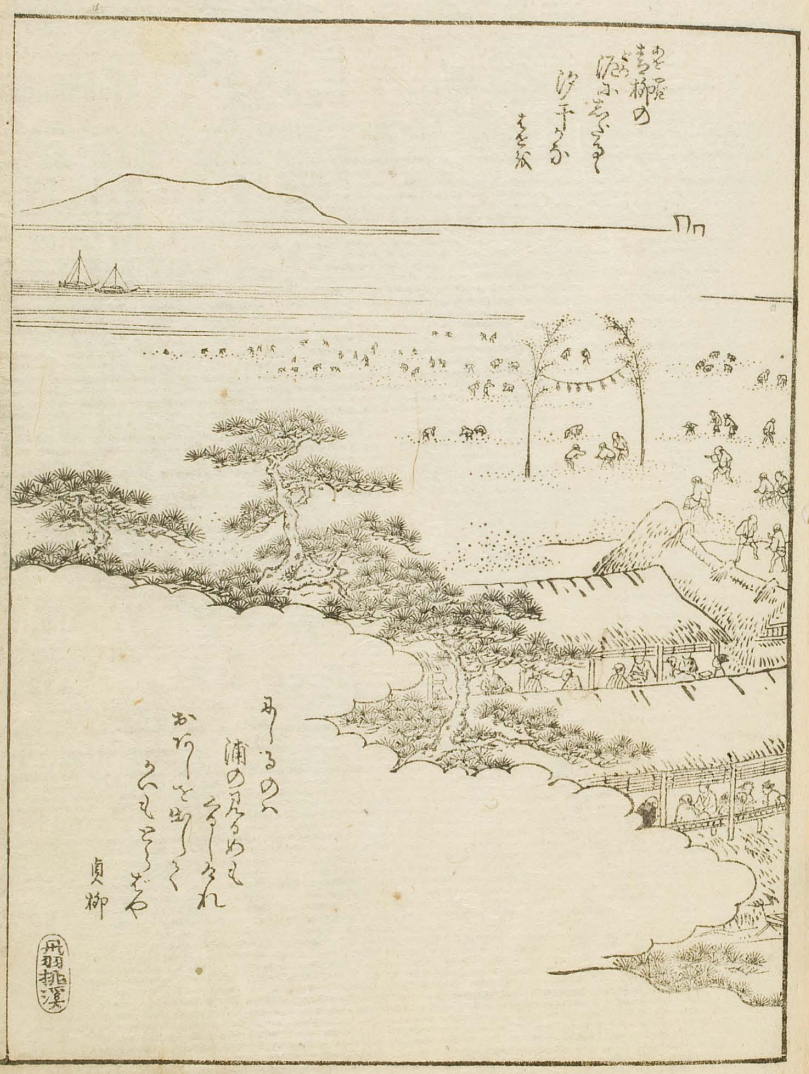
井と表とし人皇廿代崇神天皇御宇始て當社を造營ありし住吉郡松の下に立て星霜を歷る事都て二百十七年に厥后氣長足姫尊神功に就て此地に流れ留り讃嘆して真住吉國と自然始て住吉の神號を賜ふ故に頃海神に契あるに就て萬國の廻船風波の安泰を祈て船の守神と奉事は神功皇后の紀に之神誨て寄に吾和魂を津渡中倉の長峽に居て便往來船を看て於是神の教の隨鎮坐まつる平海に海に渡る事を得たり之日本紀故に船路を守護する事を以て舳戸の人船佑の賈人船長揖取まで皆精誠を盡て祷を奉て風波の難を避渡海穏なるにめとて出帆歸帆に祷をなすとて事かゝ社頭の神燈を諸國廻船中の奉り献て夜光の不滅を煌々として其光賞の數を尽す

御神祿　万葉　住の江れ月の入くれば明ぬる神こそ知ぬ船いそるん　民部太輔

御神祿　住吉の國うれ浦の奥ゆかしれ人の花をそ



いとゞも西紙住吉の浦ゐ住吉の紐のめ吉げ石と称ゞ名海士の唯聲小
紐うゝく諸奥と神供ゝ名れば比神祇あゝと如又住吉と稱ずる事ゝ
津國風土記小住吉大神現ゝ申ひゝく天下とめぐり住吉を國と貴ゆゝに
沼名掠長峽の第ゐ到ゞあれゞ真ゐ住吉を國ゝくゝく攢ゆゝて真住吉と
称ゞ御社を定む今の俗ゝ西紙畧ゝく只須義乃奮ゝ云ゝ又住吉
勅文云住吉ゝ號ゐ事ゝ真證鏡ゝ出ゝ成ゝ成ゝ成



○玉出嶋 住吉社頭にあり。社名寄に所名とあり。社傳云、神寶滿珠を藏光
[illegible]
平安の遺蹟の旧跡難詳も海中にあり。[illegible]
新拾遺 君ちたる玉出の岸はわらるるむろのをぢいはせしのうら

○住吉の神木の中は松を第一と賞ぜる事、人皇十代 崇神天皇の御時、住吉の
大神高天原より天降りましまし墨江浦は影向の砌、二本の松忽然として一夜に生じ
たれ和大神影濃の瑞木なり。永く住吉の鎮座ましまし先表、其時 天皇
使として墨江に遣して其靈瑞を尋ぬるあり。是より其松は木綿にて掛
注連縄と引事、仏縁人の所謂影向石にもれ其地にとどめ住吉勘文云 住江
松林下に遠風霜とあれあり。自爾已来或は和歌に詠じ或は詩に賦し
住江の松と賞讃せしとなり。事かしこれど古人の序にもこれる砂住のえれ
松もあひとゝの名のふかぼゆと書れ、万葉にも

清江乃末笑松原遠神我王之幸行處

抑この茶の松は嵩山記に其精変じて青牛と化し又伏亀とある其實と

嗚呼長寿なる松樹、二本茶あるのは其後の中は腐朽あり狀龍のごとし歸
飛節之ごとく或は扶苓龍骨なる生ず丁固が夢を牲が東枝西枝始皇の封我朝
なも管家の愛樹紀納言の辞などあるこそ其德牧峯をぐらべ

千載 古ふるる松をのがたく同くまもりもりやすもけれの月

續千載 住吉の松も老ぬる代はあひて十ぬりうもれ姿ぬ乃道

日 君ぬ代の久しかりぬ人さため住吉の松

風雅 おれ生くむこれ浦なる見渡せば波ふるふ住吉の松

宗祇集 春みどりの松はしたはるかるむれ月落ぬ波の音

○住吉の忘艸とて人古今の傳授かくて容易人の志ぬ尋ぬ歌道の
家ふるとる明くむ〜 近年の書は俗説を双書
道をしる住吉もゆくむ住のえれ岸あくて人言ぬもれくさ

住吉の海濱の
万葉に又新勅撰
名産あり

○忘貝

いとなあるゝ
ものひろひむ住吉の岸ふるてゝ忘れ貝　後撰

墨の江はりとゝ乃ゝ
ゝ忘れ貝とふ
ゝ

○忘水

住吉の洲沢とのゝ忘水ゝ
ゝ

人もみな結ゝ
ゝ忘水我のみあるゝ
ゝ

夏虫の
ゝ沢の忘水思ひ出ゝ
ゝ

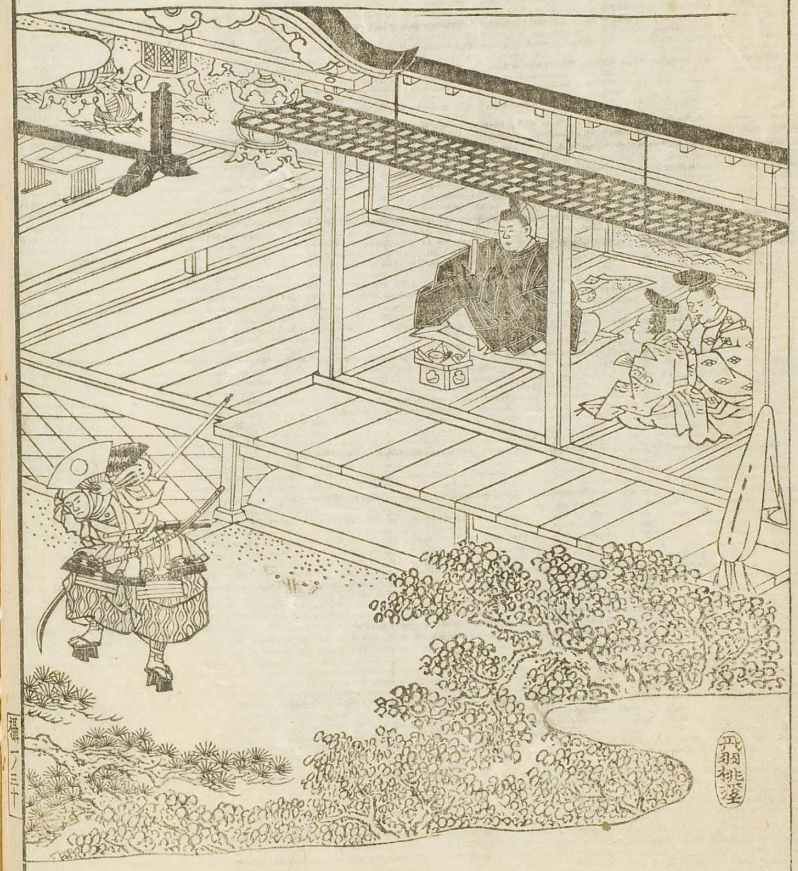
○白鷺

社記云當社の神使
ゝ
ゝ

橘樹　當社の秘庫
ゝ本殿北の側に樹る
ゝ
ゝ
ゝ

住吉御田祭式

其一



田樂法師舞踏曲

五月廿八日御田神式ハ急し作り作りて天下の幅を穢ひきうぢりを穢へとを

其二
植女
儀式

和田横
後の
兵卒の
指を
拔く
戰ひ
事
神功
皇后
之韓
征伐の
体を
表す

其二

○齋神攝社末社遠近ニ多〻次第ニ標記ス

○若宮八幡宮　一ノ神殿の南ニ西向の社ニ祭神　應神天皇相殿　武内宿禰神勅有テ朝鮮國ヲ　神功皇后の胎中　天皇ヲ授ケ給ヒ紫微國ヲ征シ給ヒ流水ヲ中ヲ隔テ給ヒ凱旋ノ時　皇后住吉の神勅ヲ蒙リ三韓ヲ思ヒ平ケ流水ヲ中ヲ隔テ給ヒ凱旋ノ時　皇后住吉の神勅ヲ蒙リ三韓ヲ思ヒ平ケ給ヒ　誉田天皇ヲ産ミ給ヒ　應神帝ト崇ク　若宮八幡宮と崇ク

○楯御前神社　四ノ神殿の西北ニ向ヒ　祭神　武甕槌命　常陸國鹿島明神　又春日明神四座の内ニ延喜式ニ楯原神社とあり

○鉾御前神社　三ノ神殿の西南向ヒ　祭神　經津主命　下総國香取明神　又春日明神四座の内ニ相殿ニ慶田明神と号ク古ハ楯鉾の神相殿ニ

○船玉神社　楯御前の西南ニあり　祭神　天鳥船命　穢田彦命　延喜式出　傳記神秘

○海人子神祠　船玉祠の南ニあり　祭神　菊姫　海の神ともス

○御井神祠　海人子祠の南ニあり　祭神　彦火出見尊　豊玉姫　神代巻ニ

○立聞神祠　臺宇玲瓏門前ニ一ノ井ト云ヒ是ニ　長岡社ニあり故ニ長岡社ともス　祭神　彦狭知命　經津主命の別号ナリ　春日社ニも称ス　南口十三社長岡十五社　今ハ住吉十八社の神ホトトギスあり　相生松ト云ヒ書ニ曰　十八社の神ホトトギス申ハ榊七本　松七本　柱七本　南七本　是則神の正躰ナリ　一ノ祭殿の神ホトトギス　松ハ二ノ祭殿の神ホトトギス　柱ハ三ノ祭殿の神ホトトギス　十八社の中十五社の神ハ長岡宮住道里ニあり　住吉ニ

○貴布禰神祠　蓮池の南ニあり　祭神　高龗　祭ヲ祀ル　日早天の時雨を祈ル　靈應遠近ニ

○后土神祠　小神館の東ニあり　祭神　保食神ノ

○惣社　神供所の倉の内ニ三十二神を祭ル　惣ハ倉ノ故ニ惣社ト云ヒ

○五所社　若宮八幡の北ニあり　天御中主尊　北ニ向ヒ　天御中主尊の二座ノ　北ニ向ヒ　彦火火出見尊　豊玉姫　豊玉彦の三神ともス

東小親若堂あり神宮寺なり法要を勤む例祭八月九日住吉里及び隣十餘村の生土神なり

○國助祠　神宮寺の内西偏坊の西にあり住吉國助の靈を祭る國助神主の靈社を建て今主祠と称に毎年三月九日社祭を施く法華會を勤むいまに舞楽なり公奏に今い舞楽なり公奏に

○國基祠　澤土寺の中にあり國基神主靈を祭る世小屋墨神主と称に

屋墨小ゆく玉垂のあちこちて屋あたりなる夕闇の宮　住吉國基

○大歳神社　本殿南を所許小西向の社なり延喜式に第津大歳神社と是なり祭神素盞烏尊子大歳神なり五穀神なり近年復華の人金銀通用契約の不変を祈季あり祈祭に祈る名其由緒をなり祈る尊殺の殺し大歳の号なり祭に祈る名其由緒をなり祈る尊殺ようなり靈應新あれたるしなり崇恭に祭を得る事疑わし

○龍王神祠　大領邑の東にあり祭神
長龍北龍の二神なり

○星宮　坂之井邑にあり祭神
大白星磐裂根裂の三星なり

○新宮　住吉寺の門外松林の中にあり祭神事解男速玉男
伊弉諾尊伊弉冊尊一神八神秘

○弓松神社　沢口村の東住所許に東向の社なり祭神素盞烏尊稲田姫
延喜式曰止狩倍支比賣神社とあり社頭小止狩倍支比
轟橋あり舊記曰第久三年二月廿日若松所前を造進ずと
社説云後鳥羽院熊野幸の時住吉其路徑あれど津国名松の

枝中小神祠と造り此宮なり則後陽成帝なり今
山社と村民の生土神なり例祭八月八日
○辨財天祠　昔八伝深沼の中にあり中古祭主館内
竹林の中に南向なり
○荒神祠　安立町にあり社地と穀松原となり祭神三座奥津彦命
奥津姫命土迦神　郡て歩王社と称に
○山坂神祠　住吉より東北廿餘所田畑村にあり山地の生土神なり
祭神天徳日命野見宿禰八王子
○三十歩神祠　平野郷中野堂町にあり延喜式曰赤留比賣命神社
祭神王依姫例祭三月廿六日爰日早天の時雨を祈る
榆の大木あり祭本ふ
○大依羅神社　住吉の東南三十町許大和川北堤の下座井村にあり
延喜式曰大依羅神社四座大月次相嘗新嘗
祭神大巳貴命月数見尊崇仁天皇五十師宮の四座なり
日本紀曰神功皇后九年昨得神教而拜禮之因以依羅男留見
為祭神主三三續日本後紀曰承和十四年七月修理摂津国大依羅社云云
三代實録曰奉授大依羅神従五位下勲八等同巻曰元慶三年六月十四日
癸酉遣使於摂津国住吉大依羅等神社奉神賦云云今座井村の土民
例年八月十八日神事を勤むなり公宮居の社と称
依羅杜　社宮居の杜と　依羅原　神離のめぐりの野公
拾遺恩神
若の代ひとさむの杜はとあとなる松と枝とや千なるちとなむ　定家
あ公をはるとなる見の系乃人ゆをるかもいけるゆ浦海の　人丸
うとのそのうと梨せむ

六月十四日住吉浦の
潮水ふ身を浸せば
百病ハ治もなやく
近世遠近那藝を
ゆれと泥湯とハ
潮ハ湯ゆゑく
浴をれば下焦の
疾痛ハ
治をる事を
醫學六要ゆゑ
ゆゑなり

依網池　羅と又網とも書ク依羅原ニあり日本紀曰崇神天皇六十二年秋七月乙卯朔丙辰詔曰天下之大本也民所特以生也中略其多作池沼以寛民業冬十月造依網池同紀云推古天皇十九年作依網池云云後世三分二割大和川とあり今世廢サ六百六十餘畝上古土人崇ぐ神依網と称ひ祭ひ祀ひ又繆ク今い仁右衛門池とよ後世あ公祝ク味右衛門池と称ひ清潔ク寒暑に個次暑ハ田圃旱天

依羅井　神者ハあり清潔ク神供ニ忽雨降ク潤澤次の付ハ井を汲んク神供ニ

依網里　今在井村と

神ニ供ク人もあれ身をいはせんとてむの里ゆあすゆくと　顕仲

をろともあれ明しくるきりくにとてむの里は茅乃抜手　仲實

きくちハ嵐ハ紀ハ杜とそ依羅の里は夜うりらん　式賢門院内侍

○三村明神社　堺甲斐町　○九艘明神社　堺寺池町旭遷社の境内ハあり

○宿院　堺宿院町ハあり　住吉神藤所ハ　○舳松社　旧所ハ　○如意神社　旧所ハ

○甲祠　旧所ハ　○八祖神祠　宿院の山ハ　○方違神祠　堺の東多出井山ハあり

右三村社ハ已下住吉の摂社多海堺津大ハ港ハ摂津国住吉郡あるを鎮座

ハ出次名保高須あるハ七堂ケ浦より南ハ旧史ハ和泉国とハ故ハ書史ハ

基く和泉名所圖會ハ

其社傳を著ク

○菅原合尊社　住吉勘文云御鎮座所神秘

○火闌降命神祠　勘文云社地

○龍神山神跡　祠ハ住吉格の側ハあり中古滅ビク

沼田龍格の名あり今れハ

○御沓石　神鎮座の側ハあり形を以て名とハ社説曰むかし、神功皇后彩羅

を征しまつらんとて出船ハ国逸都縣子負原ハ

藏む一ハ荒魂一ハ和魂多ク万葉集等の和奇ハ護ハ四ハ神座皇后

あれをかのあ石ハ小祝ハ故ハ

○后土木　神宮の鎮内西北の隅ハあり毎年四月

三十日十一月二十日此神ハ本の下ハ神供を進めあり公祀る

弾ク后土祭

○正印殿　神主鎮内ハ正印の作法と安ク上古ハ秘密して聞ク事

○誕生石　社頭猪鼻の個神鏡ハあり正解と和作者ハ

社傳云建久元年甲戌局鎌倉ハ武頼朝公

の寵ハ紫る事盛あり遊ハ妊娠ハ妻北の方ハ由井濱

ハ於ク産れ給ハ事ハ強ク霜ハ産ハ帝ハ命して海ハ

作蒲ハ産ク産れ給ハ事を殺ハ共ハ遁去ク紀伊國熊野浦ハ

ハ其治極住吉の社頭を奪ハ臨産の人ハ折節閑所

ハ忍ハ人ハ所ハ産ハ惑ハ所ハ放ク明ク事

畫のやうに側を顧れを大石あり本多孝婦と勝て稱をとゝ石ふ茂て暫く
住吉大神を祈るふ易く孝の紐と解く男子公誕生す是則大神
の應護を蒙るとゝ感ぜ給ふ同年十月三日頼朝公上洛の
時本多ちゝ公吉内武將大ふ悅び給ふ車斜あるに即座ふ伊賀
伊勢あ國を賜ふ同二年大隅薩摩の兩國を宛給れ津三神
忠久と號に津家の子孫當社を尊く尊崇し給ふ
義石ふ瑞籬公遂に任連を曳神燈を献ず事今ふ於て多くに
仕事後太平記ふ載ふ又

○津守家館　本社の巽ふあり遠祖天津瓊々杵尊十七代の苗孫
手搖足尼仕時初て津守の姓を賜ふ侍者仕奉て治孝乃女
ちゝ日本紀ふ田蓑見宿禰と書ふ母ハ紀直等の祖宇治孝乃女
鹿島ふ攝津志曰津守宿禰ハ明命の八世大御日足尼の後と云
當時社勢津守國禮朝臣ハ神祇官七十三代の名家なり
功名の人物多し祖其僕と共に援藥ふ

後養を

津守國基　康平年中の人住吉神司ふ補して從五位下ふ叙を博識
宏旨なり世ふ唱其上俊歌を善し琴を彈ず

紀氏とゝの中ふ住吉の松のゝひとゝみとゝあるふ　津吉國基

津守有基　津守景基　俱ふ國基の子　津守經國　國基の曾子宣基の六世
の孫博學多才和歌ふ
又又部の大系紀二百卷を書寫し安貞二年ふ子二月ふ安居院
覺法中を往て唱ゝ白河の女院の御願ふ
宿を公遂に神明の法樂をなし毎年供書乃
仏會ふ花嚴ゝ神明の法樂をなし毎年生八月ふ
住ふ

津守國平　紀國の子和歌ふ

後古

系社家ふあり郭公　八月もとゝぬ住よしの里　津吉國平

津守國助　國平の子文和年中の人　津吉宣平　津吉棟國　俱ふ國助の子　津守國冬　國助の子
弘安年中の人秀歌撰集ふ出ず　津吉國道　國冬の子　津吉國藤　棟國の子　津守國宴
國冬の子應中の人　津守國久　國宴の孫應永年中の人俱ふ侍歌を善く多ふ播に　津守國顯　國助の子
津守國益　國顯の子父子俱ふ和歌を善し和琴を彈ず　津守氏女　國助の女和歌を善し和琴ふ
彈ず父兄と譽を共に

○後村上帝行宮　社勢津吉國宴の能ふ沙宮と云
延元七年足利義詮伴て南朝へ行
實ゝ仏年二月廿六日吉世賀名生宮ふ出ず住吉手幸し

○松榮亭　社勢ハ吉家ふあり　將軍家國初の御附入御し給ふ
千家ふ從し松泉亭と号ず

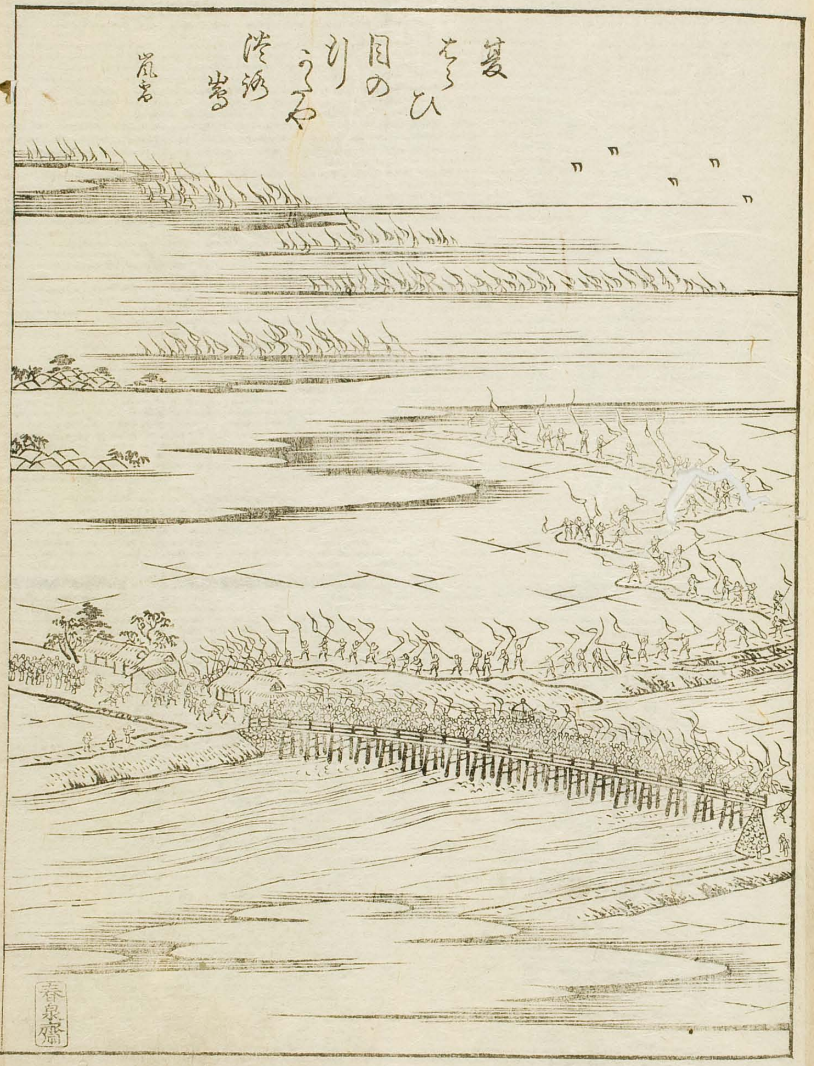
○神馬舍　社頭ふあり田多村の神役の者毎朝牽ふ毎夕牽ふ近年喪
しなれと大坂東西大春多氏より書附し神馬ふ牽る

○田嘗見宿禰七姓之祖神　侍者御者ハ七人の御子ふ持ゆり則七姓ふ
賜ふ住吉の氏人なり住吉氏の祖神毎年四月中日
上一月中日氏神祭あり御會所と
神床之所　一ハ御會所の内ふあり是宿氏乃ひ津氏の祖神後白河院當社ふ詣給幸
の時和歌を請給ふ御宮あり今ふ至ゝ仏所ふ於て和哥あり
一ハ同所の内ふあり高床氏の祖神一ハ墨江山の上ふあり祠なし之を

津氏の祖神　寶殿二所　一ハ大鄭村ニあり是大領氏の祖神　一ハ道北邑と法華北を町計所中ニ
あり是神奴　神跡一所　住吉東方畑中ニあり祠なし
氏の祖神　是板屋氏の祖神

○神宮寺　本社の北ニあり舊号新羅寺　天台宗東叡山ニ属ス天平二年
孝謙天皇住吉大神の壺若ニよりて建営し給ふ
高麗仏　昔より秘しそ開扉かし　西櫃日光
本尊藥師佛　因光仏四大天王十二神將等定朝の作
阿弥陀　観音勢至　釋迦文殊　善賢の
西常行三昧堂　の三尊ハ安置ス　東三昧堂　三尊ハ安置ス
二層塔　東西ニ両塔あり　金剛界　胎蔵界　大日如来　四天王　安置ス若ハ
寶塔の画　後ニ御産文殊画　塔中柱繪八雌雄の龍　各変態
極彩色　狩野山樂筆　両扉十二天　其外佛殿後壁の画両塔ニ
鐘樓
法華會舞樂石舞臺　今王祠の西ニあり　今王祠　僧坊の西ニあり國助重と
多くあり　ニ重子供ニ山樂の筆
氷室特堂　本尊虚空藏菩薩　多ニ四天王　五大力菩薩像　寶藏子安
重ス
八幡俗傳三住吉大神　化身ハ八幡　宿室あり　什寶○五色佛舎利○五部大乘經
画ハ其外輪蔵　壹匱　紙金泥　竹と　編　悦ん
白河の女院の作預り　津守領國の奇寫　○大般若經　細書六十卷全部
光明皇后　○法華經　細書八卷　六百卷
御筆　弘法大師筆　○興正菩薩加衣沙
其外　教品あり　ハ　に　器と
○元亨釋書云兼平七年十月廿一日　勅明達於住吉神宮寺伏純友云云

○津守寺　神宮寺の巽ニあり　瑠璃寺　延喜元年の建立ス
住吉社ニ共ニ造習あり　津守浦ニ出現
本尊藥師佛　脇士不動毘沙門　講堂　本尊觀世音　日仏師の作　鎮守　弁財天
多くあり
○朝日山莊嚴浄土寺　神宮寺の東ニあり　真言宗　白河院作　宇應德
元年津守國基の開基ス　中　迦ハ文應元年
興正菩薩　重興ス　本尊不動明王　弘法大師の作　弁財天　定朝の作左弘法大師
右興正菩薩
告儀石　傳曰國基　寺ハ建立の時紀州和歌浦より　礎石ハ束ム出船
一貫ハ添ヘ　玉津島の神ニ上る　遷送　作れ　國基　和歌
年ぬれと老もせすして和歌の浦の幾代ニかあるぬ玉津島ハ　國基
歌半ニ天女出現　海江風波穏　原　島山ハ古寺ハ　巨石ハ
送る　是和歌感應の驗　其功を得る　其後國基　詔　うけて再興　ん
地　の　の　金札を掘出す　其銘云
七寶莊嚴極樂浄土ニ　國基都幸　内院ニ表し　境内方八町
勅願所とあり　其後十三年を　屋　堀川院作　永長
元年三月　勅使　廚宮　式賢卿　講師　模川　愛朝　伝都
讃師西塔宗心　阿闍梨等　風元供養　諸堂　然
莊嚴炳焉　星霜累る　今ハ形　の　の　浄域　ハ
國基の再建供養の解　封境の地　考ふ
今の神宮寺と一双の地と云
鉢洗石　當寺境内


菱
ひ
月の
り
う
石
清水
岩
嵐
春泉画

懐大和橋
住吉大社神輿
還幸
新仏神仏神

みな月廿日の
夜住吉の
御神幸の
大祓
神輿
数万の神光
照らして
大和橋の
水凡
是ろ
住吉の
神人
社頭へ
還御
丹羽桃渓

あれが
大膳の
神車
八百萬代も
神の
手落伊衡

みな月 晦日の
夜住吉の
御神幸の
大祓
神輿
数万の神達
大和橋の
住吉の
神人
社頭へ
還御
かしまる
兵羽桃渓
されば
大晦の
神事
と
夏
祖の
まんく
手洗伊衡

○住吉神社有二箇年七十五箇度祭祀粗撰大祭記焉

○正月

元旦若水　二日　天長地久御祈禱　歌会　三日　奉幣　四日　踏歌

七日　人日　八日　神宮寺加持香水　九日　緒鎮弓習禮　十日　御狩

十三日　御結鎮　弓箭の大禮　神功皇后三韓退治　廿六日　蓮哥

○二月

祈年穀祭　五穀豊熟の祈禱　神主權神主　神館に於て大神祭　公事根源曰是は太神宮以下三千一百卅二座の神を祭せる也其所のたしなみ也　諸国々に於て幣を捧ぐ　周禮に祈年は豊年を願ふと見えたり　祈年祭官に於て白猪白鶏を奉る　諸国乃あがをとりて　天武天皇四年二月に初て祈年の祭国に於て度々勅使を遣す　祈年祭又十一月新嘗祭に度々神人大和国に出て其道筋馬上にて祭衣を着し　後を使し　路次一日に彼所に到る　天香山を去る事半里　火山口神社　祭神　神功皇后　埴使　於て饗宴を設ち　香山の社司と共に　後を使し　頃と云ふ其時に　賢木榊に　食を　身を　清む　古より其土に入る　所定　天真名井　神井　水極て清し　是昔神代乃　霊妙なる　清き　土と云る事　二つ瓶半に　已に多く　賢木あり　使　打て　埴の器に　其　天平宝と　祭り　大神に供す　其　二月初日に住吉に出て　翌二日に帰る　新嘗祭に十一月子日

出て　丑日　住吉に　飯る　両度　供に　平宝に　送る　神　供の祭器　抑　埴を　取　盛物を　取れを　日本紀曰　神武天皇　天香久山の　埴土　八十平宝を　こねて　こねて　こねて　こねて　諸の神に　献る　埴安　土　埴安　土　埴安　土

神幸の供奉もある例あり敢て古の事なれ紀ふおよばざるみを唯任者の
作田に古た画ゐも見へく紅葉の俗衣ふ都美の生絹の衣服に
似くると為し者ふ清ふ花笠被を頭みん裏面し古代の風俗
の出立なく神輿前にふ神者次前にとん堺の宿院之俗ふ作藏所と
○旨曽
大祓
六月ふるまい則廿九日ふ用ひ大祓是び則晦日ふ用ひ
海年神輿と舁案住者松原ふ来り海色みく潮治清ふ添し神迎めるく
神輿一基社系ふ出しく神人社僧祝頭ふ俗し
社司ふく騎馬みく供次既ふ堺の作藏前ふ到る初メ社僧
六七紫袈裟と着し素絹と着し素磨笠ふ載き騎馬みく神ふ先達て
堺ふ到る七堂伽藍御祓道大ふ洛ふ祝頭ふ請次表ふ入まい神輿
又神と宿院の假宮ふ迎し
任佐ふ還幸其時堺の地人船長漁師の
神輿と新大和橋ふ飛ふく送る数百人の炬火の炬と走し
ふ西ノ宮洲之庫次磨ふ石の浦く南ふ泉州貝塚作所
岡田ふ火を的とし神幸とあ
大坂の地人伊達桃灯
の紫数の桃灯
と
酒機嶋ふ奉を揚神輿
住者の火替と
て名祓又荒和祓と
ふ出ひく祓をけりせ中ふ
公事根源曰大祓
六月十二日二ふび首天武天皇の御時ふ
鰐様かとの時も有神事ふ時ふ源付ふき
祓ふ百官一月ふ
祓ふ百官ふ
○七月旨
虫干
續紀所ふ出く虫干あり
○八月旨
名摘
十五日
連哥
廿日
九月會定
○九月十三日
相撲會
相撲會ふ神輿を王出嶋頓宮へ渡し
注連と纏て
二鞍ふ
貢物ふ出社ふ献ふ
品貨物を交易ふ市
社頭ふ升と多く
切麻事之江次第云神祇官領切麻
世説向答曰
秋の魁し
秋ふ
秋と
秋と
秋と

を入れ器に取鉢として
もれも同じく賣買ス

升買ス分別ス法月見ノ祭

同月晦日

王出雲の神祇

又北条ニ鎮ニ云当社も出雲の大社ニ準ス
諸神出雲の大社ニ會シ給ふ説其論古今決セズ王出嶋ハ当社ハ
故ニ神送ルと云ふ社説云ふ甚非ス天下の
秘匿ル所なり齊七月ニ於テ祇を祀る事深秘ある

○十月晦日

新嘗祭

今年新穀とり初メて大神ニ進る祭式ハ神王神館ニ奉籠
安春國家繁盛の大祭ス昔ハ当國の國司当社ニ詣シ奉幣あり
神馬を献ス饗を設け神事を行ふる事穀初ス
ハ天下平寧ス例ハ神器と称セ事おふ又ハ
微シく奉幣の儀式僅ニ十ヵ三と存セ是公事根源ニ又ハ
相嘗祭わるん神祇令ハ大優任吉穴師大神恩智惹冨葛本殿
紀伊國日前ハ神ハ祭とのくに宮幣をうけ給ふ
ハ祭くるし延喜式ハ相嘗祭の神七十一座と又ハ
と書くあひむぐの祭とうむ云云

○十二月十日

神宮寺仏名

晦日 燈籠

附録

任吉例祭之記ニ見ル

○三月三日

任吉汐干

ハ日ハ任吉浦の汐干ハ遠近社頭ハ群集
遠く出ハ真砂の洗ふ小児ハ鎌ハ光殺ハ海辺
もあり海濱ハ茶店軒を連ル

上り帆の淡海を分ル汐干の船

去来

蛍火樓ハ二ツ味ひく去ほひうか

雜篇

○六月十日

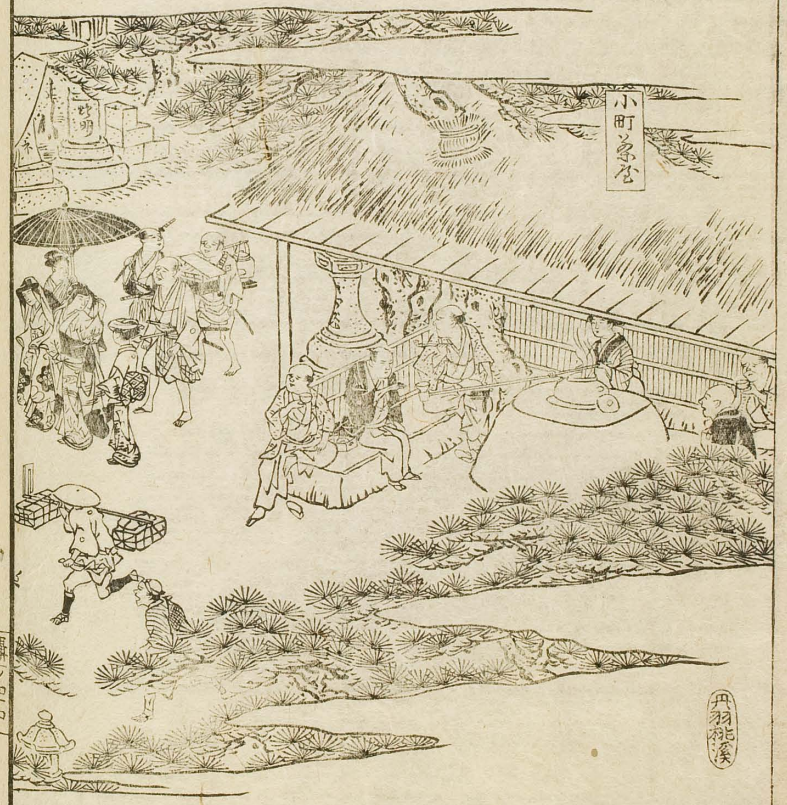
潮湯

ハ日 鉦世 石清水 諸人 社頭ハ群集 任吉浦乃潮水
俗ハ小 正倉と 蓮ハ 蜜驗 炳然 土人曰 熱堂 牟宮乃 温泉
祇の神 典 ハ 流ハ云ハ日 熱堂 牟宮乃 温泉
牟 汐干 祇の必 十五日ハ到ル 群集
小 潮泉 ハ 尋陽 記ニ曰 雞籠山 間ハ 勇泉 ハ 中華
朝 陽 ハ 時 ハ 海 ハ 潮泉
潮 陽 ハ 戒 ハ 海 ハ 潮水
故ハ 萬 ハ 体 ハ 虚 ハ 寒 ハ 冷 ハ 性ハ 功驗 ハ 釋名ニ曰
殊ハ 身 ハ 体 ハ 虚 ハ 寒 ハ 冷 ハ 性ハ 功驗 ハ 釋名ニ曰
器ハ 名ハ 器ハ 器ハ 器ハ 器ハ 器ハ 器ハ 器ハ 器ハ 器ハ 器ハ 器ハ
引と云云

住吉
小町茶屋

續古
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

後德大寺
左大臣



松平侯
玉出の
岩を
申くり
大江丸

小町茶屋
[illegible]
菓の
[illegible]
九十九
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

墨之江 住吉社より一町許巽にあり 後世埋もれて 既に田と成り

万葉

馬のあゆみ遠くとゞめよ住の江の岸の姫松見てしのはん 豊雄

古今

住の江は松ばかりにあらねども月のひかりなりけるかな 貫之

後撰拾

ちはやぶる神のいさめも住の江は波もかけじとかけじとぞ思ふ 国道

後千載 九神

ありしかよ神代もきかぬ天の原ふたつの星の住の江の岸 後成

住吉細江 今の長山川流れて龍橋獨梁橋の下流なり

新古

夢ぢかよふ細江にさゝる澪標ふかきにまよはぬ人にあふかな 相模

千五百番

住吉の細江の水も澄なくに何ゆゑ恋のつもりそめけん 顕昭

千首

住吉は細江こえ出る海人の舟はまあらそふ秋半の月かな 宗吉

住吉浦 部て当社の浦と

後拾

住吉は浦の玉藻をむすびあげて渚の松は法とこそ見め 元輔

同

住吉の浦風ふくゆふぐれ岸うつ波の音ぞさびしき 恵慶

新勅

すみよしの浦ふかみとる白波は沒る月の光なりけり 一條右大臣

住吉岸 又岸堤とも称 凡て岸の松原なり

万葉

おもふ波のゆくへをかぎりとる住よしの岸はなほ姫松にたゞ

後撰

もみよしの岸の白波よるゝにあまはれそやふるはるかさ

拾遺

住吉の岸は岸波わら屋の松乃枝ゝ色ぞ浦さびしき 東持朝臣

同

夢ぢかよふ岸もせさうん拾ひ小舟ふかくやくいもれん 漢人忠岑

新集

住吉は人の方なれかう岸堂の茅は花も春はぞ 定家

玉本

夕ぐれに鶴とゝゆる住よしのきゝ堂の萩をあらす波 右大臣

住吉岸田 又濱田小田とも号 仲哀帝の御代に門田と

万葉

住よしの岸を田ふそう苗ゝ稲の老もかるまであるかな 人麿

風雅

松ばかりの水せたいれて住吉のきゝの上田ゝ苗とる哉 宗長

玉本

住よしの岸田は去の若菜ふたゝびの初立もそ春はしる 為家

同

ときゝうは沙沢水のうへふ岸のあゝ田に稚苗みどり 仝

住吉岡

拾七

住吉津　古源氏　日本紀云　雄略天皇十四年正月　身狹村主青等共呉国使將呉所献手末才伎漢織呉織及衣縫兄媛弟媛等泊住吉津云云

住吉里　むかしの神領廣しゝ中ゝ猪飼ゝ

万葉

住吉の里と海しるべ　ゝ　ゝ　ゝ

拾芝

住吉津　古渡津　共呉国使將呉所献　雄略天皇十四年正月　身狹村主青等
第媛等泊　住吉津云云

住吉里　雄略紀云　手末才伎漢織呉織及衣縫兄媛
南も堺ノ津ともいへり　猪飼津

万葉

住吉の里と浮しくも老蘆のまくらくさ君ぞ忘るる

拾芝

宮古ゆくと侍ぞ住吉の国は住吉とて里ぞゆけ　忠見

墨江池　勅文日墨江池の南ハ大年社あり云云　是とこれハ神田の南ハ岸
芦原と字をる沼田を墨江池といへ　拾玉

夫月雨のすゑは江後に見ゆ云云　海より池ゆ西へ白波　義鎮朝

夫木

あつさをはらの嵐ふかさる墨江の杜とうかへる住の江の池　仝

同

これの杜　仝

津守浦　一名あ　千載

神代より　続古

あさこれ　限ある涙も　あ大絶言　隆季

ふかくまて　義鎮

[illegible]

万葉

大船の[illegible]

続古

君ゐ代代[illegible]

彰後撰

[illegible]

彰勅

[illegible]

長居池　住吉の[illegible]　苗見明神と云云　拾芝抄

皇の長居の池ふ水をみくのとうふる世の新そ見へける　常陸

長居浦　社説云水源長居池より流く細江川とて其下流海ふ入る所の浦曲とて云云　突中吐懐編曰長居浦万葉ふ倭後國ふあり　千載

君さへくさ数も長居の浦をこぬ中ふ[illegible]　法下辨資

彰後撰

嵐吹伊駒の山れ雲晴くるあのうふふとある月ふ[illegible]　大伴皇子

彰千載

沖津波さもつくるとも若ふ宇長井の浦ふ水かそく先を　後恵法師

同

君ゐ代の千とせ数へくとせさ数へる長居のうれ松と露ふ　左大臣

協門後

杜の秋れか年の浦ふよる波のかゆくそ袖ふあれける　忠度

千五百番

君ゐ代と長井のうふふる国露も第代ますと老ゆゆく　崇德院

義圓

兼昌

丹後

佐野の渡小池
百葉又後拾遺
あみのうしの佐野小池
かれぬまもなく
きぬかとうてみ
後人日ちれも
後人しる

後の九神
佐野小池
佐野渡図
桃溪

長井濱 上と同所

若ち代をかけて濱のうらふるむらの沖ふかくかすみ渡れん　常盤井入道

日

きさの代の長井の濱はてれるいそのかすみとあらそふまで　顕綱

日

若ち代にかはらぬ濱ふかるる川のあまくだれる世もあらぬ有る　濱人名所

濱松岩 住吉岩の一名なり　藻塩草 摂津国とあり　又濱松堤といふ　新勅撰ふかとあり

年ふるいくよのとまりとなめるん津ものうらに濱の濱松の岩　俊成

出見濱 社記云住吉松原の直前なり海と見る意あれば今の松原の濱といふ　一名長崎浦といふ

住吉の岩の濱はまあるらあるをもてなれくもりむ見沖　人麿

名所

長崎の岩の濱と住吉と長崎おもしき波ら落むるん　内大臣

千二

秋の夜の月の光も住吉の濱乃有明はまくら　家隆

高燈籠 出見濱ふかるる夜走の船はまくらに濱夜ふかる方角をいふ　住吉大神と祈まいらせ燈籠の灯消ふ煌々と光輝くと也

粉濱 或曰今の中在家村の海辺也　又粉洲とも称ス

住吉のこたの濱の愧あけもこそ思ひてのこるや恋ひてうるむ　濱人名所

住吉のまつのやこたの川ぞくも見えかくれてのこるや恋ひてうるん　定家

楠岩 社記曰此所を見る楠沖岩祠あり

名所

うれ波ふきちる後のてらふと楠ら岩とこそ有ける　盧主

淺澤 本殿より式丁許巽ふかる古木　燕子花の名所なり今の田圃とある

千載

月毎ふ淺沢沼の花ろをうれるうたをたれりらか　為家卿詠

多千

為家卿詠

淺沢小野 今の大歳神社細江の東のかた　東の田圃とて

俊千

庫ち國助

下萌や先いそく淺白岩の淺沢あふつふ摘ら

風雅

落家

いさやまらつふ摘てん根ぞり生る淺澤小野の里きくも　俊成

龍橋 淺沢沼の東南ふかる　獨梁橋 淺沢の西ふかる下流と細江川といふ

慈恩寺 住吉社より東ふかる本尊十一面観世音

車之櫻 聖德太子の所作なり　後醍醐帝当社ふり幸の時再び車とかへしゆへとて

子安地藏 ほとけの西南ふかる天台宗松所山地藏寺と号ス　本尊地藏菩薩長六尺許

床菜菴
一休和尚
故棲

讃曰　一休和尚

唱下宗風賓句裏轉
機輪竹篦飯掌拈
佛魔俱不親吹
毛之尺揺動煙
茸慣戰作人
七事随身八方
受敵乎教要津
呵佛罵祖倩為
金人淫坊酒肆獨
朗天真宗門法要
須還宗純　抄
臨濟正法今墜地但願
祖教再興焉
成文者菴主図予酒賛需
賛書以賛宗云
文安丁卯腸月日　宗純

林菜菴古蹟

住吉坂之井の村中小あり曾て紫野一休和尚こゝに暫く假居し給へり今菴室荒廢して什寶一休自筆の軸物數品又は後小松院の祇園の門あり又海神の社人又領氏山古蹟の抱物あるとそこゝに藏む傳云一休和尚ち後小松帝の落胤なれとも母の腹を安に其胎の初ここに生ふ傳寫次

大領氏什寶大畧

言外和尚像讃
無端滅却大燈家鐵眼銅睛劍樹牙
一句分明言外詮親聞華叟若曇華
右一休子宗純謹拜讃

虛堂和尚像讃
育王住院世皆率放下法衣如破鞋
臨濟正傳無一点一天風月滿吟懷
右天澤七世東海兒孫一休宗純賛

華叟和尚像讃
靈山孫言外的傳蜜漬茄子五十年
兒孫有簡聰禿漢顒得癩兒牽伴禪
大機弘宗禪師華叟大和尚頂相
虛堂七世東海一休宗順謹拜賛

靈山和尚像賛
大燈子大應孫正傳臨濟宗門
儼然靈山一會何妨三界獨尊
右一休子宗順敬拜讃

臨濟和尚賛
喝々々當機得殺活惡魔鬼眼
晴明々如日月

天澤七世東海純一休拜

大應國師像讃
看々佛日照乾坤天上人間唯獨尊
禪老如無渡東海扶桑國裏暗昏々
右前住大德一休謹賛

達磨賛
東土西天空弄神半身形像現全力
少林艸座成何事香至王宮梅柳春
前龍寶山大德禪寺純一休
天下老和尚謹題

一休和尚像自賛
詩情禪味俱無能龍寶山中滅大燈
盲女艷歌欺樓子虛堂七世慕苴僧
諸徒圖余陋賀請賛不免自許
文明六年閏五月日

天澤七世東海順一休天下老和尚印

驚住王古蹟

櫻沢一ツ橋の南にあり

桃民俗人冨士が宅地とつゝいい

日本紀曰
履中天皇六年二月喚鄭魚減狗王之女大姬即妃高鶴
即妃納於后宮並爲嬪於是二嬪恒歎之曰悲哉吾兄王何處去耶
天皇聞其歎而問之曰汝何歎息也對曰妾兄驚住王爲人
強力輕捷由是獨馳越八尋屋而遊行既經多日不得面言故
歎耳天皇悅其強力以喚之不肯來亦重使而召猶不肯來
恒居於住吉邑自是以後廢以不來是讃岐國造阿波國
脚咋別凡二族之始祖也云云

安立所
難波屋
名松
輝ノ五十二

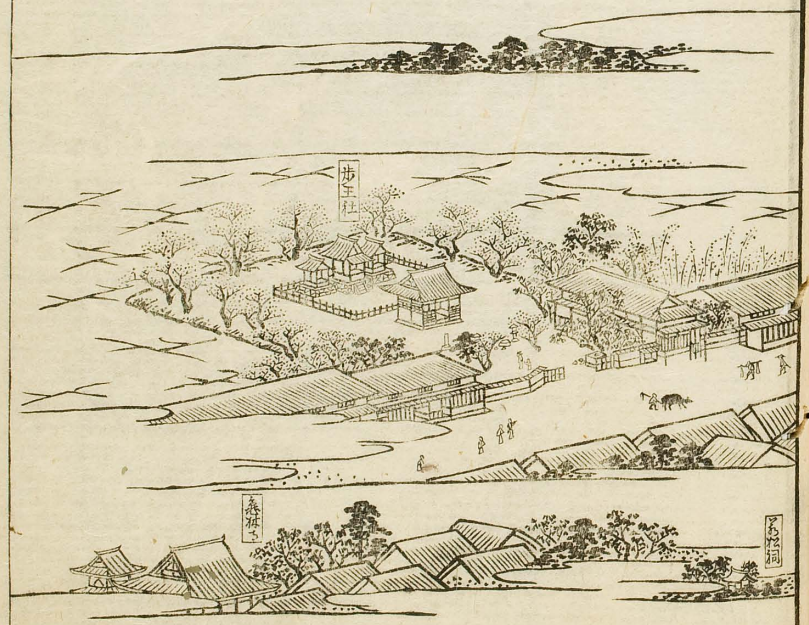
紀氏六郎
笠神小
ひさうた
りのく
者の
うちゐ
りくの
色ぬへ
松ゐそ
ゐなる
貫之

王子祠 津守寺南にあり 熊野一王子の系統 後白河院御幸記云 京師東山王子社より熊野王子祠と遷し奉る 熊野まで九十九所の王子祠と遷し奉る 熊野遥拝の地 熊野山社人の説云九十九所王子祠を祀る 熊野権現伊弉冊尊 王子は御神と書にづき 又一説に若一王子 天照太神と 系図と

住吉名産 蛤 俗に出見濱より出る 松露 岸根松の下真砂の中にあり 海藻 神功皇后 香附子 燕子花 浅沢沼より出る 筆 安立町にて製し 諸国へ売

金輿 諸方へ出す 赤き長柄の傘と引き真通に出る 菅笠 住吉踊 着く 赤き帽子と笠の張に赤き鼓腰に帯し 傘のもとに張る 京師大坂の町々 左鄙 踊る 京師大坂及び 傘のもとに張る 六月十八日より出現 踊る 郡 茅 早乙女の 俗に植女の 正面の名居反橋の辺より南の方 潮寿 安立町すその古名 小町茶屋 住吉の松原に上り 茶屋出し 柄の長き杓 茶碗 茶屋乃 載せゆくの人に 飲む 今に安立町の小溝にあり 茶屋乃 女に上と 小町茶屋と 安立町を丁目 雑波屋笠松 雑波屋 栽 四方に蓋 霞 笠の 樹の 七尺 東西十五間 南北十三間 周廻五十間 年々 柄 枝の 代の 松 往来の 旅 人に方 繁 人に 賞 と云事か

霞松原 三寶荒神



松原や
春の
たつみの
花
春や
竹敬画

霰松原

今の安立町とつゞく昔いはゝ松原なり法世安立とつゞく者なれと鄙たる町後たとえ次第殘りなる松七本あるなる所を又畑とわしく

字名今七本松と云
歩王祠若ハ又へなり

万

わすれぬる霰松原住吉れ松とおもふあとなれとあるぬらも　長皇子

文本

小夜更て霰松原住吉のうゝ風ふきあるあり　紀家

は

うゝ風のあゝれ松原ふたまとひ丈せうある住の江乃波　定忠

は

をもいとは救つりゝ人ゝ者ゆも成ぬあるゝ也松原　僧正行意

関帝堂

安立町亀林寺ハあり當ハ禪宗曹洞法王山と号ハ開基ハ心誠和尚延宝五年の建立之本尊毘沙門天ハ七堂濱ようゝ七度ハ七所ようゝ仏躰分身しゝく上るあるとハ合く全躰とハ又仏地と称ハるとも

関羽の像ハ心誠和尚大明より將来しゝる又什物ハ関帝君の金字

あり初ノ水府黄門卿当住しゝ水戸

祇園ハ小安しゝ近年ハ遷次

遠里小野

安立町の東ハあり遠里小野村とハ称ハ名産ハ赤ハ古称あり榛の実と泥ハ絞て住吉神燈ハ用ゆ

万本

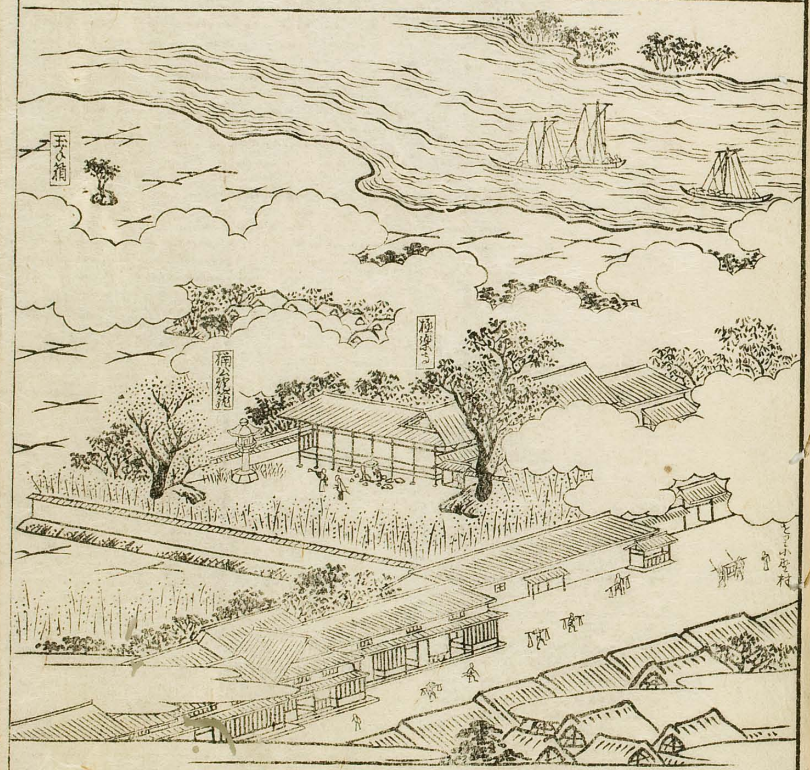
住吉の中ハ名さて小野の小ちたりくとまる夜のさゝ里ハ

続古

はちたちる者を里とけく杖風ふもれをゝ夜いまやうゝらん　中務親王

続拾遺

ゆるさい者を里小のくちてゝゆゝをなみのとゝひ富ハゝゝ　藤原仲敏



遠里小野

燈油の名産住吉神領あり て神燈の油ハ献を

文本

侍宵や
主巫里小野の
油賣
ゝゝたハ
とゝの
ゆこゝゝに
年
後へゝゝに

吾妻親書

極楽寺　奎里小聖村にあり今叫唐と成り女僧あり長三尺位寺説云和州志貴山の本尊と同丈と

本尊毘沙門天

石燈爐　一基高一丈許勒の日建武三年三月

梅正成建　其餘い磨滅して見へず

朴津　遠里小聖の南朴津谷又朴津寺の旧跡ふ礎あり住吉社説曰住吉郷の其一と中古朴津村東ふ移つて今い名のみ残りて村民なし朴津の海潮と跳ねて風色真めて故丸

朴津の海と賞美しく古歌あり

墨江の朴津ふさちてとりて芳は武庫の海ふ出ふ私人　高市連黒人

あ引の山はさひふ雲たてを朴津の海ふちりて見へ来る　紀貫之

玉ゑ箒　奎里小聖村南二町許圓中ふ塚あり土人ちゑふ玉ゑ箒と云ふ上丸

出る者忽祟ありと接そふ丸玉ゑ箒の謬なるべしと

住吉末社の旧地と見へたり

後考あるべし

吾妻　住吉郡十八町許ふあり今吾孫子村と称日本紀神功皇后紀云

細子海と泊住橋津図廿一首の中ふあり海辺くしてと古歌

多し今い海辺ちかく廿余町隔てり土人吾孫の孫の字ふヒコと漢

半ふ知らず今子の字ふ身ふ吾孫みと三字ふ書と

吾孫みと三字ふ書と

朴津風ふちかくたちたつの朔の海れわさけの塩ふ藻うりてれ　漢人雪氏

阿胡行宮　吉孫村ニ在リ　神功皇后ノ行宮ニ御ス　日本紀　特統帝六年五月

大聖寺　我孫子村ニアリ　吾彦山中ニ坊不動院ト号ス　真言宗中興開基

盛長法中　例年二月初午日ニ法會ヲ修ス

本尊聖観音　長サ八寸　泉州泉南郡水間ノ海ヨリ出現

像正躰ニ天八寸　傍正切基の他

當寺本尊の縁起泉州水間寺と同し

茶師堂　本尊茶師日光月光

和泉名所圖會ニ見ヘタリ　聖徳太子作

護摩堂　本尊金色油不動明王ハ　大師堂　弘法大師ヲ

智證大師の作　安置ス

五福天祠　吐枳尼天黒毘沙門　聖天　牛頭天王社　此所の生土神

弁財天　聖徳太子作他

鎮守　神功皇后を　什寶　龍の口　連理の桃　連理の椿　櫛正成像

東内

新大和川　水源和州ヨリ流ル　大和橋　長サ四十五丈　堺津北の入口ニアリ

住吉神輿之替所　住吉の南ヨリ海ニ入　紀泉二州の往還ニ

此所ヨリ送る　是ヨリ住吉の生土人ヨリ社檀に

犬替ヲ

○是ヨリ南方堺津ニ入ル路まで　浅世物泉の國史ニ　徳長ニ　日史ニ基く

和泉國ニ初ル記ヲ見ル　泉名所圖會ニ著シ　堺の町人天正中所持の茶器等の

神社仏院ハ應照て見るへし　又堺の町人天正中所持の茶器等の

圖會ニ著シ　拾遺ニ　當時の所持名品の様ハ記せし　利休の所持国寺

壷　宿院町　渡邊氏ニ　又紹鷗の覩名ハ堺上之町酒家千宗乃家ヲ

ありて　ハ　殿く　淺蔵ハ著ス

法香丘　船堂村にあり　林木蒼々として　[illegible]　[illegible]住し又秋い墓の花繁く蘭生し
近隣游宴の地と為す　滄溟洋々として　[illegible]

稲荷の祠　法香山にあり山地の生土神とす　例祭八月十八日

法香浦　法香丘の西北海をいふ　或云法香とは太子信仰出家法華国より仏香分
奉仕太子山浦に香船を擬し　[illegible]

万葉

夕されば塩みちきたる住吉の法香の浦に玉もかりてむ　[illegible]

新後撰

住吉の法香の浦はなほつくし枝のしたにはかやそそがん　行能

新千

玉藻なる方やいづこぞ荒川法香のうらはなほのあけぬる　為明

船玉神社　北花田宮村にあり延喜式出雲国の生土神とす

鷹耳部旧蹟　豊合村といふ　日本紀曰　仁徳天皇四十三年秋九月阿弭古と
しめゆくて嶋に対して云ふ名百済国に在り倭船と云ふ因茲酒君を召ぶせ
ちむ則韋縄を其足に結ひ鈴を其尾に付け腕の上に
居く天皇の上に是日百舌鳥野に行幸あり放ち
雉を放獲さしむ是豊浦の初メなり是より豊耳部を定め其
鷹を飼ふ所を豊耳邑といふ
今の豊浦の辺りなり

万葉

打ちかへす波の上に浮かべる百舌鳥野の御狩をぞ思ふ　公朝

同

御狩野に今を盛りの尾花かひくまもなく靡く秋の風　顕仲

草津大歳神社　北花田村にあり延喜式出雲国の生根神社とす住吉の神と
称す石燈籠の銘に曰大同二年の
勅造と云云　燈石詳

楠原神社　西喜連村にあり延喜式出住吉の楠御前社あり同神なるべし
法華明神の下に摩訶迦葉社とす後世神名相変る事信下郡
生土神とす例祭九月二日

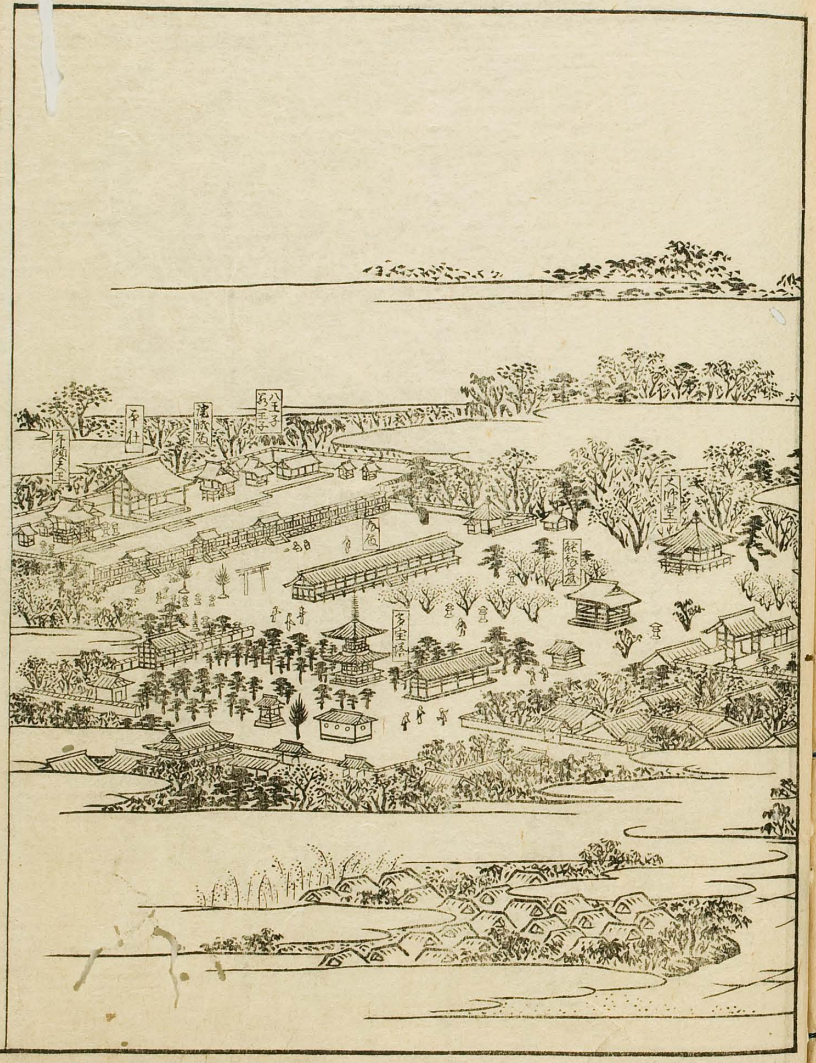
西沈　西喜連村にあり
度々四百三十余町

新家町　北花西成郡に接す

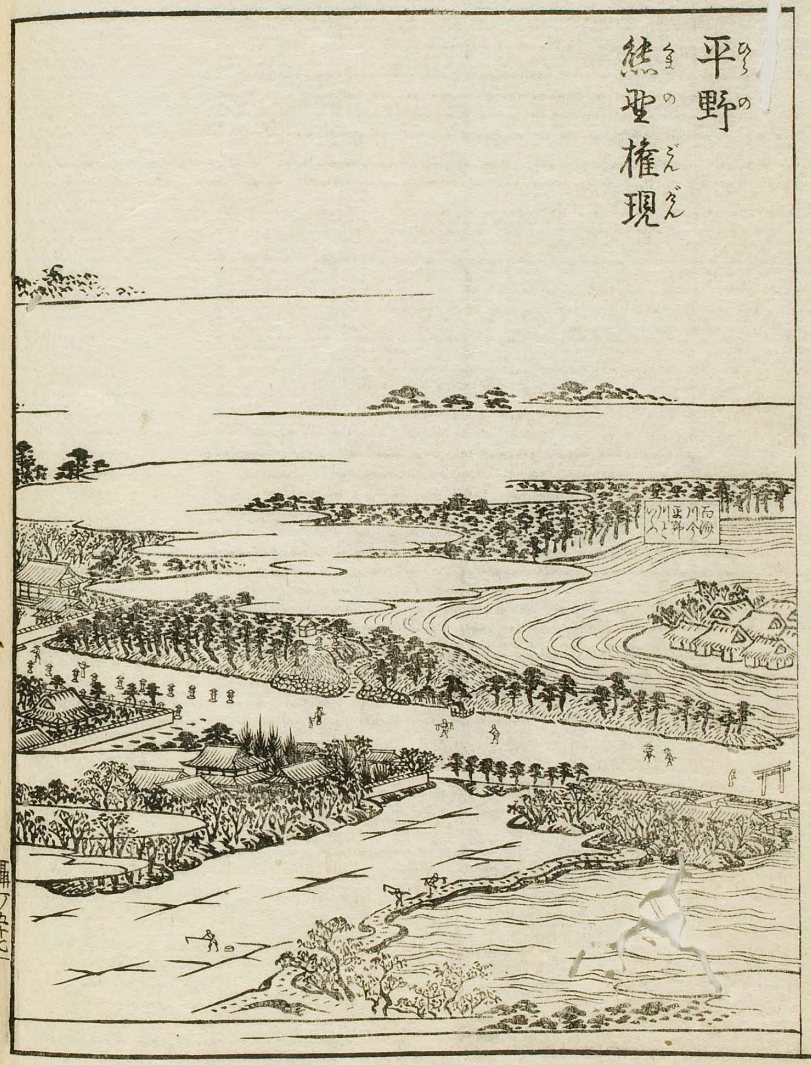
昆布竹馬糸細工麦藁細工等の両側に貨食の家列す二文字屋伊丹屋
昆布屋九屋等の荘と風流に営業す　鰹魚の鮮を以て饗宴す　女奴に粧粉を施し
蔽膝の赤に天鵝絨の襟松金泥に裳裾を著せ酒を勧て色あり　粉ひぢり
茶客の子里の波清し一帆の順風に利潤を得　墨江の大神に法の祝詞
を捧げ　山酒旗に年り其勇威を聚るもみな神徳の餘光なるべし

朝夕に[illegible]あそあれなれ　[illegible]

貞柳



平野の
熊野権現



往古往道ふあり素神菅ヒ此地の生土神ヒ次
例素四月十五日 額の天滿宮ハ實鏡寺の宮理豊
德嚴尼公の筆 銘書ハ原此里ハ揚角村乃出在家
ゆり今天王寺村の内ハ世ふ名る〻原此里ハ揚角村及び住吉郡乃
入に新家の町 町戸の色ハ西成郡其町幾ハ住吉郡奥
粉然〻〻〻〻 曉〻〻〻〻

○紹鷗歌

社頭の神雜と〻系人紹鷗出棲の旧流ヒ〻を或曰
遺臣秀吉ヒ 湯政治ふ所往某の所此系亭ふく所藥ふ
ちゃられ 風雅ふ賞ド 故ふ天下系流ヒ〻地名と
ある〻又村長日此地名豊太閤已若〻〻村中ふ云傳ハ〻〻ん

○名產和中散

当村ふあり津田氏と〻家傳云今〻〻六世の祖ふ
宋本と〻〻〻〻

社記曰任右郡平聖郷にむしろ杭全庄とひしゝ公 後鳥羽帝乃御時
慶の聖公新の名ふらひ後世小賜ふ〳〵爵孫亦こたに住居しいはゆる
上慶聖麻呂小賜ふ〳〵爵孫亦こたに住居しいはゆる
年中亦師紙園より古松小新向しゆ〳〵それより地を祈〳〵
崇神天皇の名付より爾来仏邑坂上七名の長當社を
當宮寺六坊を建立し弘法大師の法流を傳く 醍醐帝
初合の祈祀を陵し毎年六月 九月祭礼公卿ひ行り忠
仕郷の聖堂町小茶師堂あり 全興寺と号に聖徳王の
建創ふく本尊も御自仏なり聖堂と為る初メ聖中年
奥院と称しなる 後白河院御宇建久元年三月三日
き人の山伏愛を貴なり社侍小勧請のよしを
されを當社四五町神の方一丈の松あり〳〵ひ
去りぬ其松今の社地小仏松なり光を放ち愛樹松今ハ
又社内小柳二本一松小生し〳〵雙三羽飛来る故ハ柳を祈ふと崇む
其時人々奇異のおもひをなし〳〵かの愛を崇さるハ微妙霊験の
尊容なり中に弟熊聖三所権現と崇め社を営む例年三月
三日例来公勅むかの山伏も役小角の化現と〳〵者堂小
崇を尚 後醍醐帝元亨元年當社の来由公慶願ひ奏られ
多居の額 熊聖三所権現と書 宸翰を賜へ又當社の東
又六町嘉内〳〵所ハむ 親〳〵 年 荒 慶ハ及び〳〵公御親若堂
一宇寺侍六坊遷ふ 応永三年今の所ハうつし又悲乃
当侍公崇ハ六坊も今小坊と成ぬれ
迦陵十三村尊信勧〳〵 蓮驗窮かく目々小新〳〵

長寶寺

平聖郷西脇町小あり 真言宗
王舎山と號ひ女傍寺ふ

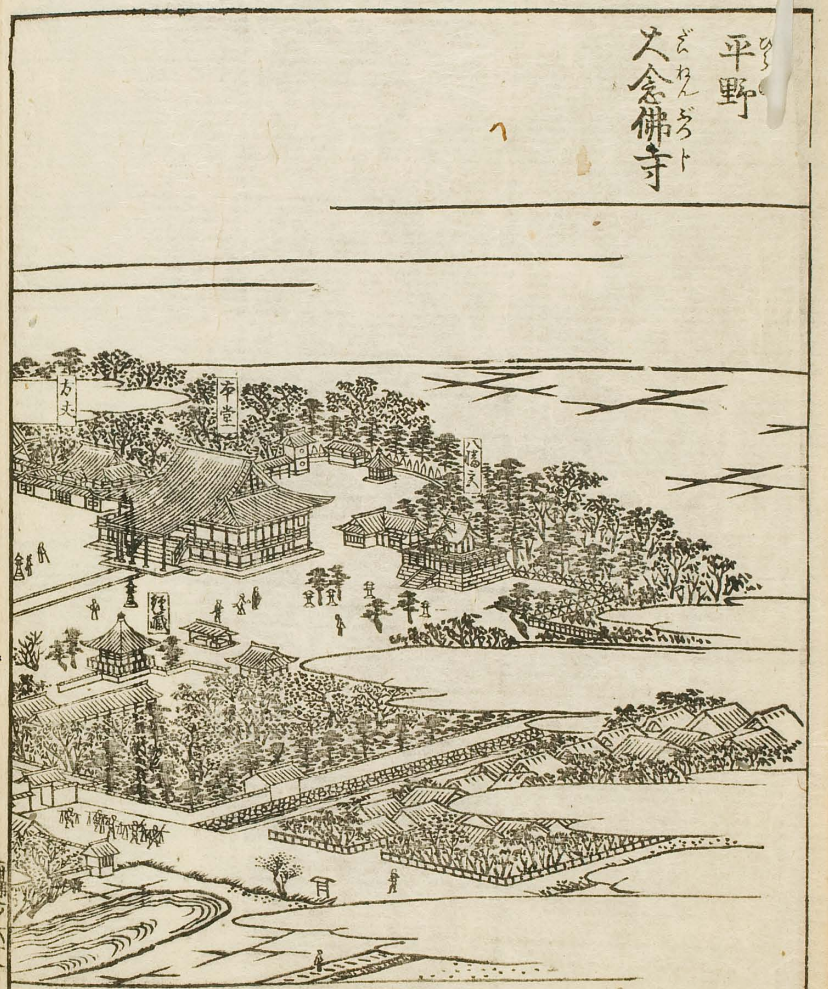
本尊十一面観音

長六尺 長六尺 田村堂 田村將軍の傷公安に
當寺ハ大同年中の建創ふく本尊ハ坂上田村麿の守本尊ふ開基
慈心大姉ハ田村將軍の息女 桓武帝の皇后 葛井親王の御母
あり 天皇崩し〳〵後御錫杖を下し弘法大師の宗意に基き
當寺小あり 塔頭阿弥陀院 光明院 至院 来迎院 かとありて
寺中の北丘尼慶心坊 蓋の中ハ不動明王の導ふく公
裏途小至り 閻魔王の護を授ふく 養生〳〵又 嘉吉元年十一月
十五日本堂みく焼 焼堂の中小入ると遺く 忽舎利
化〳〵公放ハ又其翌年ハ郷の經蔵 鐘の附 客傷を人来り
焔魔王の像と一日ハ仏り 消失ぬ 仏師堂と〳〵
當寺寄湾の軒ともを天王寺来傷坊 恵法寺書れ〳〵公よりみ
かつ茶瓶〳〵
今小流布〳〵侍り

坂上家

日郷長宝寺の小小あり 征夷將軍坂上田村麻呂の長男廣聖
帝の御宇當杭全郷に服ふ居住〳〵地名も廣聖と
号に後世小至聖郷と〳〵 亞聖郷と〳〵 苗孫ふ小永く相續
〳〵世小至聖廣と〳〵 比丘尼と〳〵長寶寺
の寺職と〳〵又坂上の族仏地小あり公七名家と〳〵
今土橋 未吉 之上 遠藤 等 森 堂 せり
例年六月晦日任右大稲小七名家の内其年の頭屋より児
き人花笠を着く馬上ふく出るされ旧例之又當郷聖堂町ハ
神社あり任右の末社なれい
三十歩小足人より当に畧しぬ

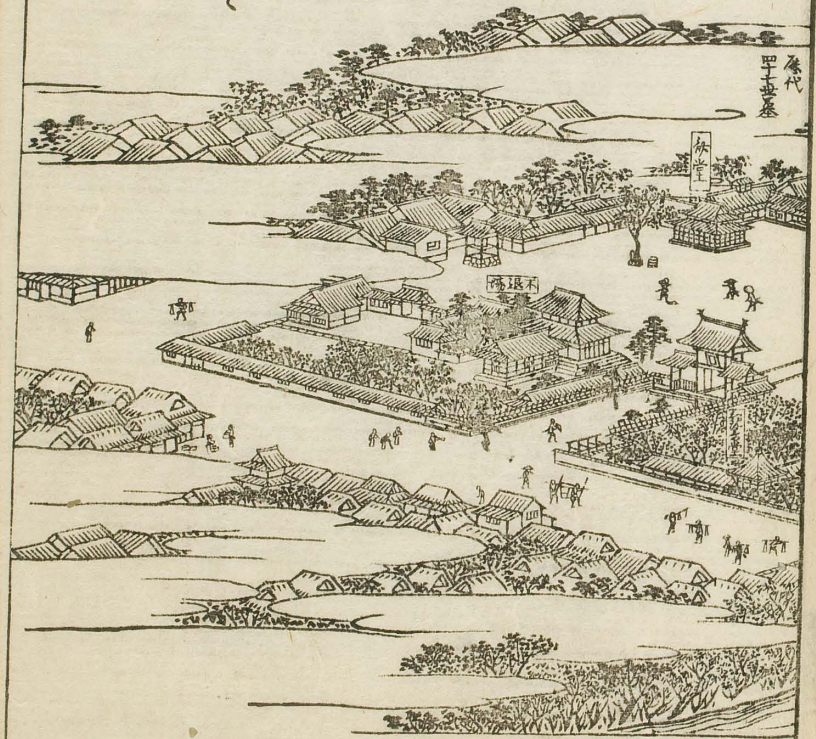
平野大念佛寺



長福門院小極楽六時
讃の給ふかくてとおもふ
つきよ　ゆくるふ漢ゆくる
ゆふ　念佛法とゆく弥
散ゆ　瞻仰ちん

今そ　ちれ八月成
ちひこ　みても
みてれ　市園の
ゆふ　ゆれれ　を

皇太后宮大夫
後成



諸佛護念院大念佛寺

高野郷ニあり　融通大念佛宗本寺

本尊天得如来　永久五年丁酉五月十九日大原良忍上人感得の十一尊曼陀羅なり　脇士左地蔵　右毘沙門　脇檀　開山良忍上人　係中興法明上人　係将軍家　位牌　代々神牌　融通無碍の塔　當寺代々　位牌　常念佛　開山　舞堂　上人　係

不退場　本堂の巽にあり　阿弥陀仏を安し

齊堂　文殊を安し

鎮守　八幡宮とあり　本堂のうしろあり

観音堂　額系通筆

轉輪藏　一切經を藏む　本堂の左にあり

累世塔　開山良忍上人　當時四十七世忍通上人　まその廟塔

石表　門あり　不許酒肉五辛入門内云云

當山両祖繪詞傳曰良忍上人は原尾張國知多郡富田氏蔡通武の子なり　母は熱田の神職の女　後二條院延久四年壬子の元日誕生　十二歳の春叡嶽都率谷惠心院良賀法師の許にて經史を學び薙髪して本覺坊良忍と号ぶ　名ぶく東塔の西谷垂勅寺に一千日詣し願通の心切なるを感ずること二十三年の秋本意のごとく大乘の奥ふかくれゆきかく深くゆきなる

のうれしさもいさゆるさとりをとくとてもむ大乘のおく　良忍

圓被世人知住處更移茅舍入深居とかく古語なりけり

生れ人のよもたつのあるさとも色せぬ深山谷に入る身を　全

斯く　名羽院永久五年六月十六日上人四十六歳時弥陀仏融通念仏の弘法末世の衆生を勸誘せんとて霊岩に抑融通念仏とも一人の行とも名く衆人の行とも一衆人の行とも一人の行ともるゆゑに功德廣大なる是往生の順次なるべし一人往生成遂せば衆人も亦往生成遂ん事疑あるべからずと空中より一仏十聖衆の羅穀幢旗を授與したまふ當寺乃本尊之一日異人来謂て曰願は融通念仏を四海に弘めよ我も亦天神地祇と倡ん良忍問て曰公は誰や對て云鞍馬寺毘沙門天之藉と呈して見へ消えぬ融通念仏を唱へ聲明梵唄祇園を四衆を勸む天仁二年に大原来迎院を創し大藏經律論を度ぐ名て如来藏と云へ持る所の弥陀絵時々光を放つ　文亨釋書　太意　名羽帝も日課を修し菅神も亦二千遍の日課を授て其示現の文に曰

天神本地身　十一面薩埵　為度衆生故　示現天神體
我本師弥陀　為報恩頂戴　毎日称名號　滿一百八遍

以是念佛故　悉授與於汝　汝行三千遍　亦授與於我
融通功德力　甚深亦甚深　如是修行者　変生生極樂

良忍上人終ハ長承元年二月朝日入寂　年六十一　辺年安永二年十月十六日
勅して聖應大師と贈号あり中祖法明上人ハ清原右京亮守道の子弘安
二年十月十日ハ生年廿五才の秋故郷を出る附かくれん

世の中はなにはみのうの者人ぶかわむしの宿を今や出なん　法明

仏一首を殿ハ書く高野山ハ登り得度し當山の本尊ハ良忍上人
八幡宮ハおさめ給ふと法明上人神能ハよりて泉州交野郡茄子作村
ハ於く寺を授ゆ因茲毎年霜月十六日茄子作ハ仏華供養あり
とかやかの示現ハ融通念佛の宗風を再興し其上播州加古の
教信の若もあ且兵念大念佛宗をとゝふ弘通し遂ハ貞和五年六月
十二日入寂　年七十九

○毎年二月ハ和州吉野の蔵王堂の時當國西成郡濱村源光寺供養執り
錢餐を當寺の本尊ハ供ハ當寺木村養蔵一本茅二束
饒答ハ若ハ吉野ハ守勝の明神ハ蔵王堂ハ縁ハ絶て後
天台の一腸ハ受く一ハ配當ハ吉野ハ若ハ
仰式ん之日ハ守勝の神事當寺ハ役仕あり

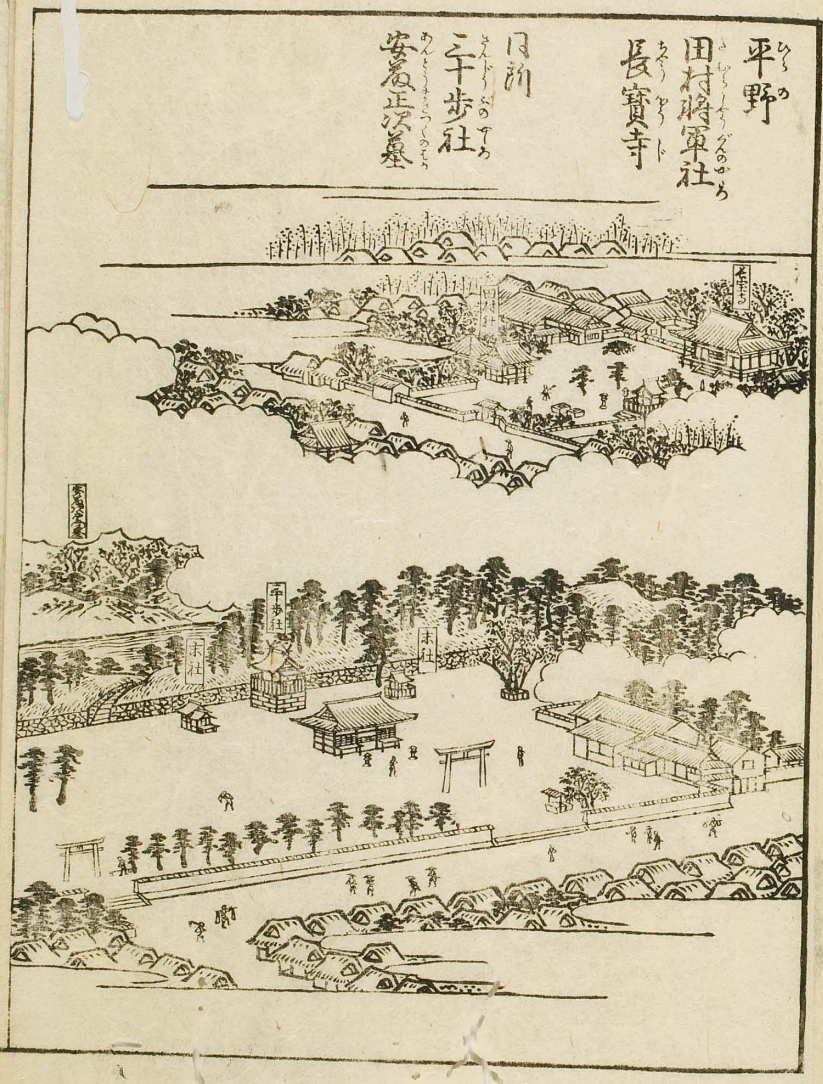
の時正日春秋共ハ毎茶四天任寺ハ於く融通大念佛會執り
社附若聖山ハ當寺上人供奉の役仕あり
是若融通念佛の祖ハ
傳る流儀ハ法明上人ハ代々
傳ハ亀徒寺と云ふ

亀鐘

當寺の頭ハ戴き海中

含翠堂

平聖郷中ハあり今むかし八十年許ハ享保の初メ
經史を學ぶ事三年の後故郷ハ帰り井上佐兵衛正臣ハ居宅
講堂ハ
庭中ハ古松の上ハ含翠堂と號し給ハぬ
日数三五七十と云く講習の日ハ
の孰齊先生京師の東涯先生等ハ
怠ハ遂ハ先生ハ領主本多侯の聽ハ達し褒賞
友直曰郷ハ近隣の小邑ハ同し
荒年ハ飢饉ハ連し者もありいざ其ハ志ハ勢せて今ハ
其備と云ハ享保四年癸十月
投く賑窮料と號し年茶と累く錢若干
窮民ハ享保十七年の秋西の國々
かる事りやあらんと云く享保ハ茶二百石ハ
と聚ハ貧ハ財と投ハ
金とあらぬ又厥后茶價ハ
辺年天明七年ハ
かつぬれの色とゝ
等ハ
傳ハ
郎齊土橋宗信あり孰
仕ハ
傳ハ角く
ハ
ハ
ハ



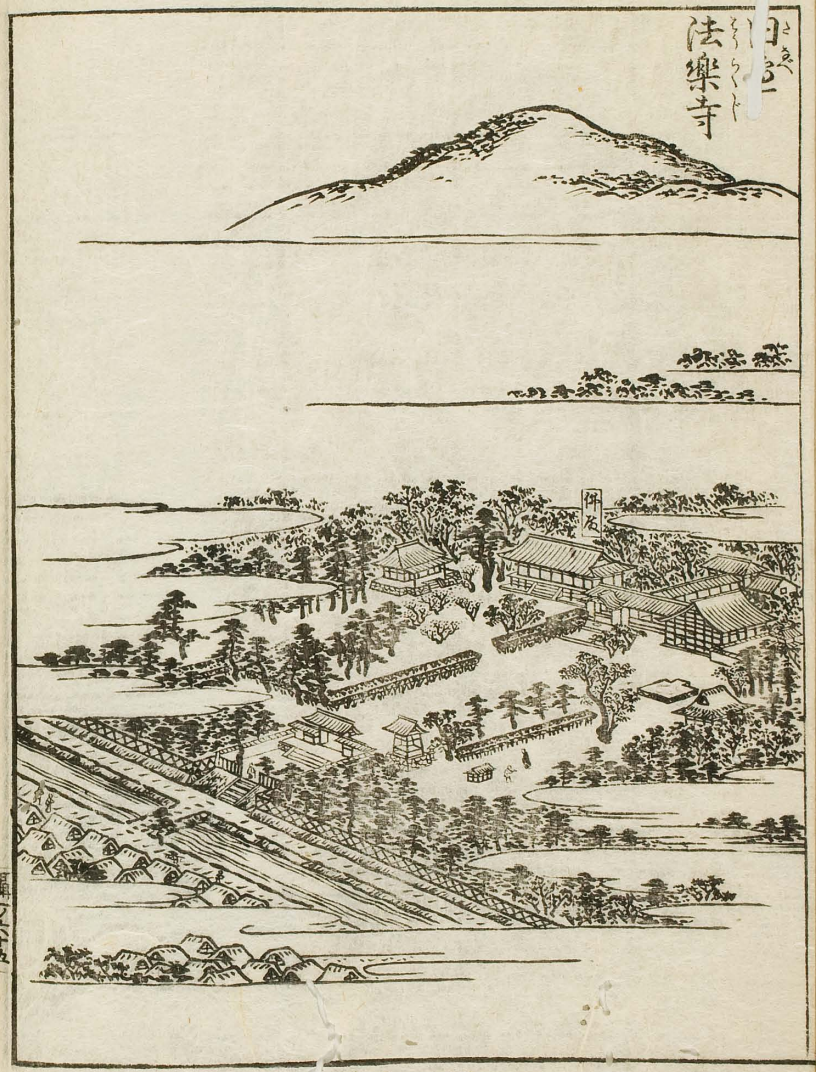
東涯先生の翠堂の記あり其文曰

昔者子游為武城宰以禮樂為治夫子告之曰割鷄焉用牛刀及子游再舉嘗所聞之詔乃實前言之戲蓋治有大小而所以鼓舞陶鑄化民成俗莫先於禮樂平野攝之屬邑也鄉人素嚮學或造京肆業或館穀師儒以問道土橋友直亦其鄉有志之士也嘗與奮族數家謀置社學既而井上氏有隙宇定以為講習之所時時會集言志將以化邑人二子在邑為著姓其地有古松一株偃蹇蔭堂因名曰翠又將置學田以期永年予丁未歲嘗應友直族人宗信之招而往得遊于其堂濡滯數日雖黍茶菓且譚古昔道偲偲如也乃請文其事以貽後昆俾無湮替嗚呼今之詩書乃古之禮樂也子游因夫子之道于千歲之後將以詩書訓迪其邑則其志固美矣昔李德裕言絃歌武城今土橋氏之聞夫子之言孫吾子東都以一石一泉莊自記曰鬻吾平泉者非佳子弟也要其所志不遍欲傳園亭樹與人者非世耳土橋氏之圖人則不然欲使講學之區永存不替乃欲託之文人凡受為善之益久而不已既謀置田以其又美以風聲一方也孔之道者亦豈可不稱述則所以享保壬子歲仲冬

伊藤長胤拜書

曲禮凡講問六
席間函丈也
容文足以指
畫

於含翠堂
東涯先生
開講筵



惠光寺 平卿ノ郷ニアリ 東本願寺ニ属ス 大德山と號ク
開基蓮淵上人 本願寺第八代蓮如上人の長男 文明ノ比 脇檀ニ開祖親鸞聖人等身の彫像安置
蓮如上人六十六才自作の像あり 蓮淵師ハ附属ス

本願寺阿弥陀佛 聖德太子作

全興寺 同郷堂町ニアリ 本願寺居 本尊藥師佛
斗願天王の奥院と称ス

安藤次右衛門正次墓 平卿 遍尻口ニアリ 元和元年五月七日 山裁ス 戒名

平聖川 舊名石海川と云 河州竹海より流ク
東成郡ニ入

東聖製產 紡車 櫓車 膠餅 綿駕

法樂寺 南田邑村ニアリ 宋吉四宋義榮 宋師 宋浦寺ニ属ス 紫金山小松院と
號ス 源頼朝公念持佛背面銘云 左馬頭源義朝一切之禮
久安二年丙寅二月十八日 法眼慶幸作之

本尊如意輪觀音

佛舍利 二顆 寶塔ニ安置 傳云ニ松内大臣平重盛公懇志ニ付 宋國
育王 請来 舎利 二顆 紫 黄 二色 貯舎利水晶壺
及ヒ外ノ圍 鑰ノ金五輪ノ塔ニ安置舎利 檀上蜀
錦ノ空圍ヲ併テ布檀下雜繡坐圍ヲ施舎利塔上小袈
裟ヲ下 署治 兼三年 己 亥 七月一日

釋迦佛 方丈ニ安置 弘法大師作 初ハ東御願寺 後ニ遷ス 現寺村安置ス
遷ス 書院ニアリ 中古当寺ニ遷時 頼の作

十一面觀音 方丈ニ安置 今獻壽天の本地佛と称ス

金寺 杜業權現と

寺記云

[illegible]治第二年小松内府平盛公開創の地なり其比内府佛道に深く一門菩提の為に宋國育王仏照國師の英風を慕ひ祠堂料として黄金三千兩を賜る國師其厚志感じて仏舎利二顆を献ぜ昂此地に仏宇を建て内府然聖系絡の附き小立寄て落成し殿堂壮麗なり後に魏々たり大正の兵火に罹て灰燼となる今門おのづから門池となりあり一の石門の内に舎利田と云内府平盛仏供に寄附せられし田園なり今字とある法樂寺小松院のあ額に寶鏡寺官理豊德巖尼公の所書梵鐘の銘に東湖湛堂律師の撰に当寺の由致を著はす又書院恵門に和州宇陀城より移し一二間の書院の襖板に唐筆を牧板に拓内府公中華育王山に黄金を渡されし事古来より稀なる説あり實説なり又伝に伝云黄金を渡されし報酬として石鐘の阿弥陀佛を日本に齎る今現在時方宗係神の社頭にあり又其写しの石碑宗師知恩寺に

あり一心不乱の已下廿一字を補益あり云々と云伝へ

武家俗説雜云小松内府平盛仏法を信じ必典として唐人日本に来り説筆に[illegible]あり二百あの金を渡して云弐百あの醫王山へ納て後に平盛の後世菩提と吊へ奉る[illegible]あの金は時の天子へ献ぜ奉り[illegible]必典に別に金百あをあたへ異國へ使ひ[illegible]醫王山に有り勅書を賜へ[illegible]平盛一生の行状を考るに仁義を專とし法人に仁恵を施し[illegible]動め惡に出ず[illegible]身の行跡を要約に[illegible]なる中興の君なり故に文[illegible]盛の惡[illegible]なり[illegible]仏法を信じ[illegible]なる事正史に見へ[illegible]一紀を盛[illegible]小犯[illegible]醫仏[illegible]日本に来り後世に[illegible]文入道仏醫[illegible]異邦の醫師の業に用ひ[illegible]我朝に名醫[illegible]服せ[illegible]仏[illegible]黄金に[illegible]醫王山へ送られ[illegible]と用ひ[illegible]の一[illegible]説も[illegible]

田魚神祠

南田魚村にあり山阪明神と称ず仏前の生土祢を創系九月二日

三代實録云貞観四年十一月授従五位下[illegible]

沈田沈

南田魚にあり 日前にあり

廣サ四百畝

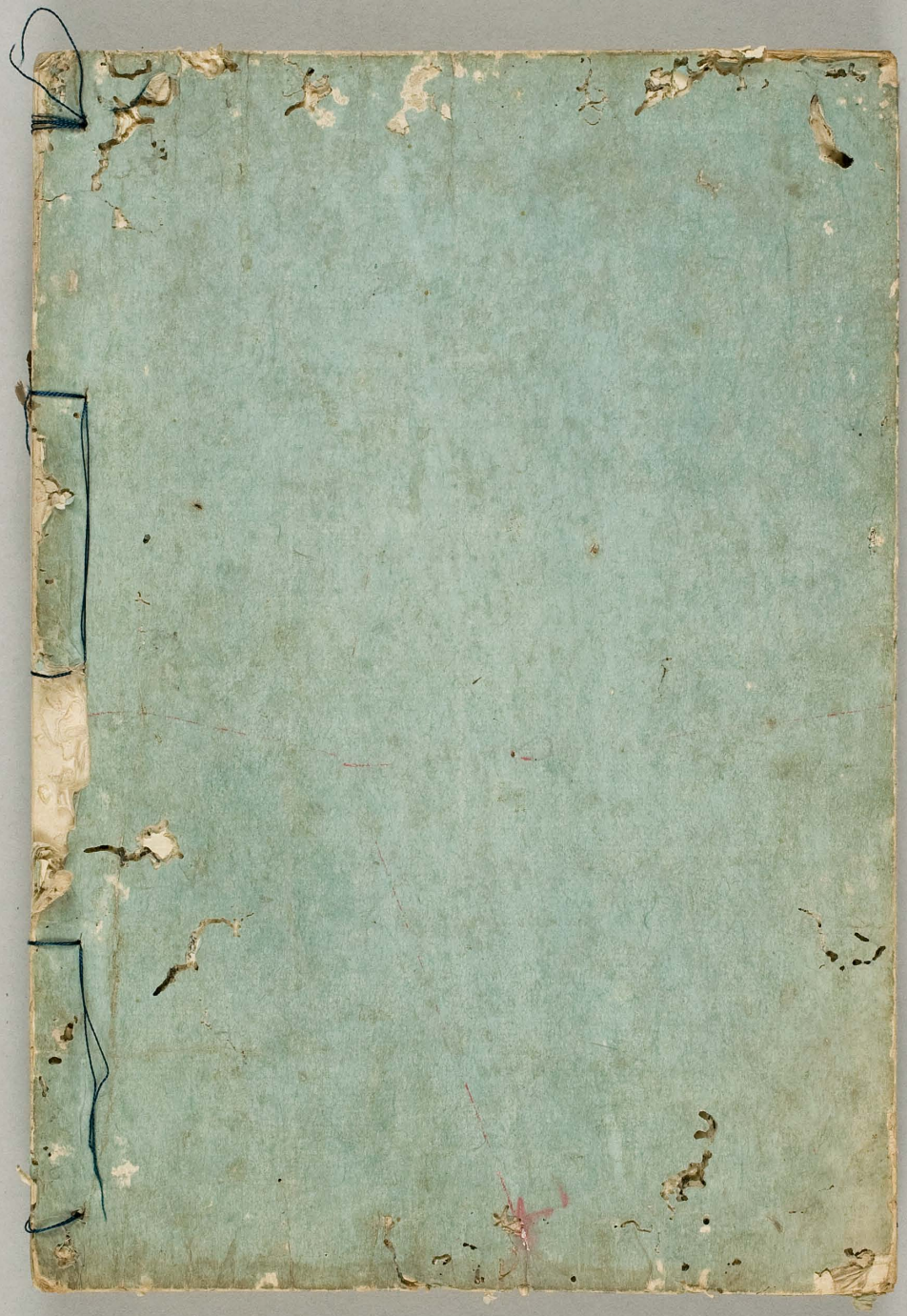
沈田沈

廣サ四百畝

攝一ノ公七

MWUL

八幡宮　東津村にあり土人云應神帝十三年髮長媛をしたがへ給ふ居しむる法人祠を建て八幡宮と崇む

鷲住王塚　住吉より五町許北街道の東にあり

大伴金村塚　同所にあり土人云ふ冠を載せ塚と云ふ又云ふ住吉神と聖德太子と推古帝とをしたがへ給ふ頃此地を定め給ふ云ふ頃此地を定め給ふ云ふ